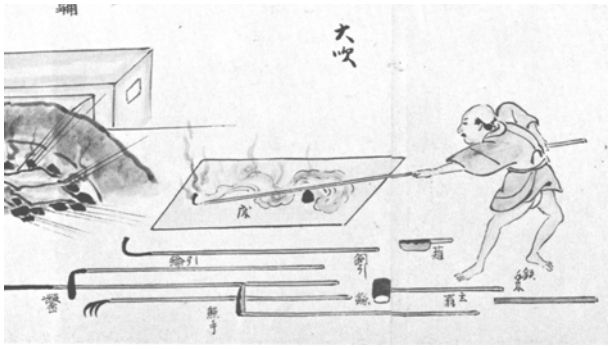
【日本の銭のつくりかた－『鋳銭図解』（銭座絵巻）にみる鋳銭技術－】

『鋳銭図解』には、江戸時代の銭貨「寛永通宝」をつくった仙台石巻鋳銭場での作業の様子（18 世紀頃）が描かれています。今回は、日本の古代から基本的に変わることのなかった銭のつくりかたについて『鋳銭図解』からみていきます。

1 原料づくり

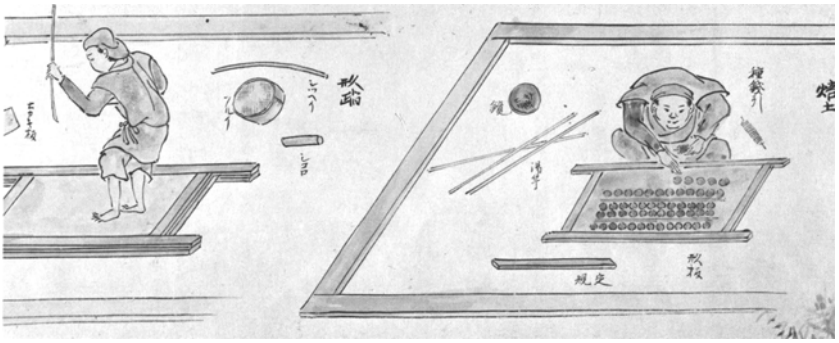
大吹:
銭貨の原料となる銅・鉛・錫などを溶かし、地金をつくります。



2 銭の鋳型づくり

種銭引:
砂の型に種銭を並べ、鋳型をつくります。

形踏 :
種銭をはさみこんだまま表裏の型枠を合わせて踏み固め、種銭や銅を流すための道となる棹を置き、砂の型に写し取ります。



3 銭の鋳型づくり

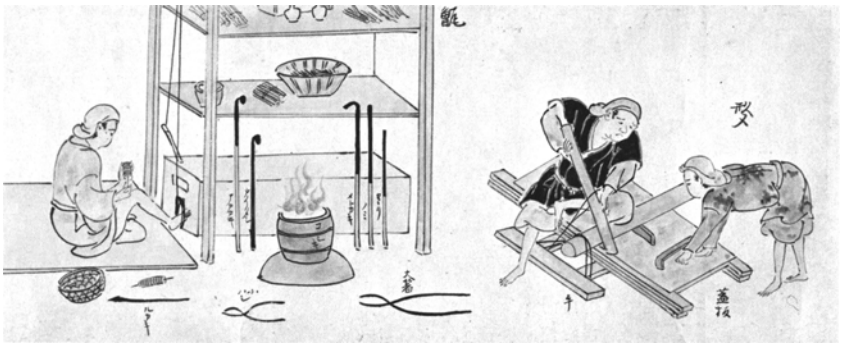
湯道切 :
鋳型に写し取られた銭と棹の間をつなぎ、溶かした銅（湯）が流れる道（湯道）をつくります。

火炙り :
鋳型を松のかがり火であぶります。型のくずれを防ぎ、油煙が表面につくことで型と銭が離れやすくなります。

4 銭の鋳型づくり

形しめ :
鋳型がずれないように表裏を合わせて固定します。

甑（こしき）:
鋳型に流すための銅（湯）を溶かしています。



5 銭の鋳造

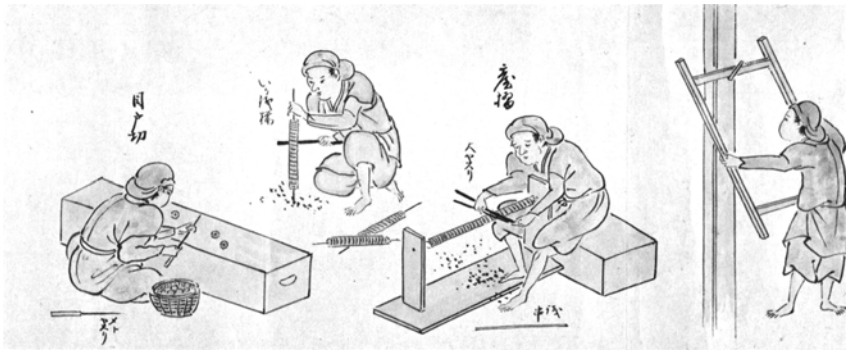
湯つぎ:
表裏2枚一組の鋳型を立てて固定し、上から溶かした銅を流し込みます。銅は湯道を通って、各鋳型へ流れ、しばらくすると冷えて固まります。

鋳出銭:
鋳型から枝状につながった銭貨を取り出しています。

6 銭の仕上げ

台摺 :
鋳型から取り出した銭貨の側面を削って形を整えます。

目戸切:
銭貨の中央の穴の部分の鋳バリを削り取り、四角の穴に整えます。



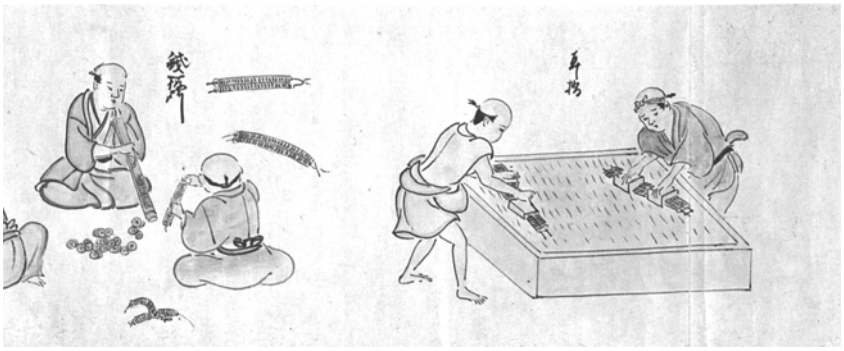
7 銭の仕上げ

平研 :
銭貨を並べ、表裏を砥石で磨いて滑らかにします。

8 銭の仕上げ

耳摺 :
銭貨の周囲をわらの中でこすって磨きます。

銭拵所:
緡(わらで作った紐)に銭を通し、「銭緡(ぜにさし)」をつくります。



* 出典:『鋳銭図解』 1923(大正12)年刊行

** ここでは、主な作業工程を示した場面のみを取り上げています。

【古代貨幣関連年表】

	日本関係記事			
	西暦	和暦	貨幣発行事項	主な貨幣関係事項
飛鳥				683　銀銭の使用を禁止し、銅銭を使用することとする
	708	和銅1	和同開珎(銀銭、銅銭)発行	
				709　銀銭の私鋳の禁止
				銀銭を廃止し、銅銭に一本化
				710　再び銀銭の使用を禁止
				711　穀6升＝銭1文と定める
				蓄銭叙位法、私鋳銭の厳罰を定める
				712　旅行者に銭貨を持たせる
				税(調庸)の布と銭貨の交換基準を定める(布1常＝銭5文)
奈良				721-722 銭貨の価値を切り下げる
				税(調)を銭貨で納める地域を拡大させる
				758　恵美押勝(藤原仲麻呂)、銭貨鋳造の権利を賦与される
			開基勝宝(金銭)　発行	
	760	天平宝字4	大平元宝(銀銭)　発行	
			万年通宝(銅銭)　発行	
	765	天平神護1	神功開宝　発行	779　和同・万年・神功3銭を同価値とする
平安	796	延暦15	隆平永宝　発行	798　蓄銭の禁止
	818	弘仁9	富寿神宝　発行	
	835	承和2	承和昌宝　発行	
	848	嘉祥1	長年大宝　発行	
	859	貞観1	饒益神宝　発行	
				867　畿外の蓄銭を禁止
	870	貞観12	貞観永宝　発行	
	890	寛平2	寛平大宝　発行	
	907	延喜7	延喜通宝　発行	
	958	天徳2	乾元大宝　発行	
				984　銭の不信が増す
				987　銭貨を用いないことを制止する
				15大寺に銭の流通を祈祷させる
				11c末　中国銭貨(宋銭)国内で流通(渡来銭時代へ)

日本関係記事		主な東アジアのうごき	
主な貨幣鋳造関連事項	一般事項（日本国内）	一般事項（中国）	一般事項（周辺諸国）
	600 遣隋使派遣		
	603 冠位十二階		
	604 憲法十七条	618 隋滅亡 唐建国	
	630 遣唐使派遣	621(唐)開元通宝発行	
	645 大化改新	628 唐中国を統一	
	663 白村江の戦		660 百済滅亡
674 対馬より銀献上	672 壬申の乱		668 高句麗滅亡
691 伊予国より白銀献上			676 新羅、朝鮮半島を統一
694 大宅朝臣麻呂など3名を鋳銭司に拝する			679 新羅より金銀朝貢
698 因幡・周防国より銅鉱石が献上			
698 近江国より金青、長門・安芸国より金青・緑青が献上			
698 対馬より金が献上	694 藤原京遷都		
699 はじめて鋳銭司を置く			698 渤海国建国
	701 大宝律令完成		
708 武蔵国より自然銅が献上			
708 はじめて催鋳銭司を置く			
708 近江国で銅銭を鋳造			
709 河内鋳銭司を寮に準ずる扱いとする			
710 大宰府が銅銭を献上	710 平城京に遷都		
710 播磨国が銅銭を献上			
	712『古事記』完成		
	718 養老律令完成		
	720『日本書紀』完成		
730 周防国の銅を長門の鋳銭にあてる	729 長屋王の変		727 渤海使はじめて来日
735 更に鋳銭司を置く	743 墾田永年私財法		
749 陸奥国よりはじめて国産の金献上	752 東大寺大仏開眼供養		
	753 鑑真来日	755 安史の乱	
	757 養老律令施行		
767.769 田原鋳銭司の長官の任命	770頃 『万葉集』完成		
782 鋳銭司の廃止	784 長岡京に遷都		
790 また鋳銭司を置く	794 平安京に遷都		
816 鋳銭司の廃止	797『続日本紀』完成		
818 長門国司を鋳銭使に改編			
818 鋳銭使を新たに置き、その官位は廃鋳銭司に准ずる			
825 長門国の鋳銭使を停止し、新たに周防国に鋳銭司を設置			
827 鋳銭司が岡田にあった時にならい、周防鋳銭司に医師1名を置く			
	840『日本後紀』成立		
859 長門国採銅使の任命			
865「山城国相楽郡岡田郷旧鋳銭司」で採銅を行う	869『続日本後記』完成	875 黄巣の乱	
869 長門国採銅使が解任され、長門国司が任務を代行			
870 山城国葛野鋳銭所で鋳銭を行う			
870 備中・備後国で鋳銭用の銅を採掘		907 唐滅亡、五代十国の時代	
881 山城国旧鋳銭司付近での採鉱を停止		－各国で貨幣を発行	916 遼建国
885 豊前国で採銅技術が未熟のため長門国から技術者を派遣	894 遣唐使廃止	916(前蜀)通正元宝 948(後漢)漢元通宝	926(遼)天顕通宝
940 天慶の乱により、周防鋳銭司が焼失	939 平将門の乱	955(後周)周元通宝	936 高麗、朝鮮統一
		959(南唐)唐国通宝 960(北宋)宋元通宝	
		960 宋(北宋)建国	970(安南〈ベトナム〉)大平興宝
		979 宋、中国を統一 -宋では,年号ごとに新銭を発行 1008(北宋)祥符元宝など	996(高麗)乾元重宝(鉄銭)
	1016 藤原道長摂政	990頃(北宋)交子:紙幣世界最初	997(高麗)乾元重宝(銅銭)
	1051 前九年の役		
	1083 後三年の役		
	1086 院政のはじまり		

【貨幣博物館所蔵 和同開珎鋳造関連資料の紹介】

日本銀行金融研究所貨幣博物館では古代銭貨の鋳造関連資料として長門鋳銭司出土と伝えられる和同開珎の鋳型 45 点、坩堝 7 点、鞴羽口 10 点を所蔵しています。 ここでは、和同開珎の鋳型 45 点についての目録および簡易計測データを紹介します。

1. 概要

当館所蔵の長門鋳銭所出土と伝えられる和同開珎の鋳型は、完全な形で残っている資料はありません。また、和同開珎の鋳型は表用 22 点、裏用 13 点、表裏不明のもの 14 点の合計 45 点があります。

材質は、土型(粘土質)で赤色系(赤褐色)と灰色系(灰褐色・淡褐色)の 2 種類があり、これは鋳型の焼成時に土に含まれた鉄分の酸化・還元の状況の違いによるものと考えられています。鋳型の多くは 2 層からなり、銭を押し付けて銭の形を写し取るための表面 1～5 ㎜には、淡褐色のきめの細かい真土層(肌土)があり、その下約 15～30mmが赤褐色の粗土となっています。

鋳型の表面には、塗型剤として鋳離れを良くするためと考えられる雲母粉(キラコ)が付着しているもの、油煙の付着から黒味(木炭粉を埴汁で練ったもの)を使用した可能性があります。また溶かした銅を流す湯道が確認でき、銭影から鋳造時の銭の向きが一定ではなかったことがわかります。

2. 凡例

和同開珎の鋳型のデータは、1点ごとの銭文による鋳型の表裏、形状データ(縦・横・厚さ)を種類ごとに掲載。

掲載するデータは次のとおり。

(1)分類保管番号　:鋳型1点ごとの番号は、日本銀行が資料整理の過程で付したもの。

(2)鋳型の銭文の表・裏　:和同開珎鋳型は表・裏の 2 つの鋳型を合わせて使用されたため、その種類を表示。

(3)銭影の数　:和同開珎鋳型に残された銭の数を表示。

(4)参考サイズ　:計測には電子キャリパー(ABS ソーラ式デジマチックキャリパ 500－445:株式会社ミツトヨ製、最小表示量 0.01mm)を使用した。縦・横・厚さは mm で表示し、簡易計測のため、小数点以下は四捨五入した (＊計測時の縦横については、今後、当館ホームページ等にて写真公開予定)。

《貨幣博物館所蔵 和同開珎鋳型リスト》

No.	分類保管番号	鋳造面	銭影数	特徴	<参考> サイズ (mm)		
					縦	横	厚さ
1	ⅡAgカチ1(1)	表	2	灰褐色の真土と粗土の2層からなる。銭文は鮮明に残る。左右に走る湯道とみられる跡あり。【口絵(4-1)-1】	50	51	22
2	ⅡAgカチ1(2)	表	2	全体が赤褐色の真土と粗土の2層からなる。粒子の大きな砂(礫)が混入。【口絵(4-1)-2】	64	63	35
3	ⅡAgカチ1(3)	表	2	表面は赤褐色の真土で、下は褐色の粗土の2層からなる。。粒子の大きな砂(礫)が混入。【口絵(4-2)-4】	48	51	28
4	ⅡAgカチ1(4)	裏	4	灰褐色の真土と粗土の2層からなる。【口絵(4-1)-3】	48	61	26
5	ⅡAgカチ1(5)	裏	2	灰褐色の真土と粗土の2層からなる。【口絵(4-2)-5】	46	60	30
6	ⅡAgカチ1(6)	表	3	灰褐色の表面は薄い真土(5mm程度)があり、その周囲を粗土で固めている。銭文は鮮明に残る。【口絵(4-2)-6】	34	60	27
7	ⅡAgカチ1(7)	表	2	灰褐色の真土と粗土の2層からなる。表面に雲母粉がみえる。銭文は鮮明に残る。【口絵(4-2)-7】	39	49	26
8	ⅡAgカチ1(8)	表	2	灰褐色の真土と粗土の2層からなる。土質は細かく、気孔が多いため脆い。【口絵(4-2)-8】	46	51	24
9	ⅡAgカチ1(9)	表	2	全体が灰褐色の細かな真土で、表面にはさらに細かな真土を使用。銭文は鮮明に残る。【口絵(4-3)-9】	40	52	28
10	ⅡAgカチ1(10)	表	2	赤褐色の真土と粗土の2層からなる。銭文はやや不鮮明。【口絵(4-3)-10】	47	39	32
11	ⅡAgカチ1(11)	表	3	表面は1～3mm程度の灰褐色の真土、周囲は淡褐色の粗土。鋳型の縁にあたる。【口絵(4-3)-11】	31	54	21
12	ⅡAgカチ1(12)	表	2	灰褐色の真土と粗土の2層からなる。銭文は鮮明に残る。銭文凹凸あり。湯道とみられる跡あり。【口絵(4-3)-12】	29	41	18

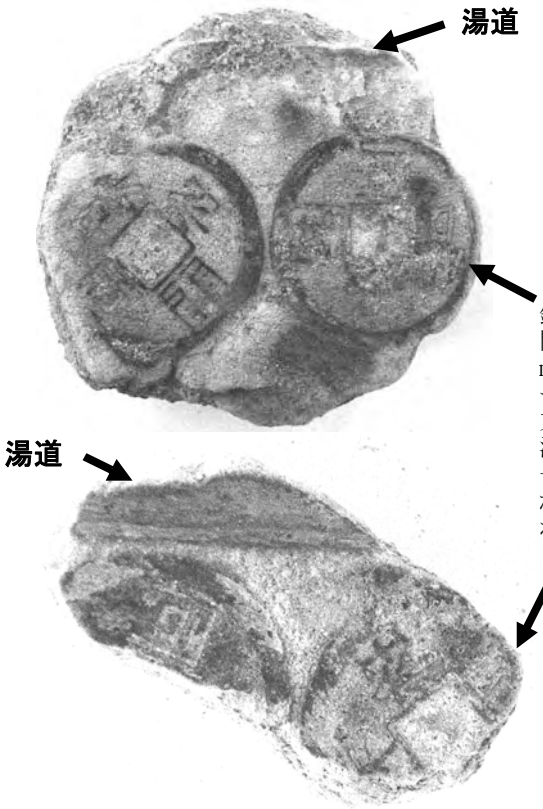
13	Ⅱ Agカチ1(13)	表	2	灰褐色の真土と粗土の2層からなる。銭文はやや不鮮明。【口絵(4-3)-13】	50	40	28
14	Ⅱ Agカチ1(14)	表	2	表面は赤褐色の真土で下は淡褐色の粗土の2層からなる。銭文はやや不鮮明。鋳型の縁にあたる。【口絵(4-3)-14】	38	49	29
15	Ⅱ Agカチ1(15)	表	1	灰褐色の真土と粗土の2層からなる。銭文は鮮明に残る。【口絵(4-4)-15】	41	35	25
16	Ⅱ Agカチ1(16)	表	1	表面は灰褐色の真土と、下は淡褐色の粗土の2層からなる。粗土には粒子の大きな砂(礫)やガラス質が混ざる。【口絵(4-4)-16】	44	41	32
17	Ⅱ Agカチ1(17)	表	1	表面は灰褐色の真土と、赤褐色の厚い粗土からなる。銭文は鮮明に残る。【口絵(4-4)-17】	37	33	18
18	Ⅱ Agカチ1(18)	表	1	赤褐色の真土と粗土の2層からなる。表面は赤褐色の真土が薄くあり、赤褐色土が付着。【口絵(4-4)-18】	28	25	15
19	Ⅱ Agカチ1(19)	裏	1	表面は淡褐色の真土、下は赤褐色の粗土の2層からなる。湯道とみられる跡あり。【口絵(4-4)-19】	35	43	18
20	Ⅱ Agカチ1(20)	表	1	表面は淡褐色の真土、下は赤褐色の粗土の2層からなる。	19	21	12
21	Ⅱ Agカチ1(21)	－	1	全体が淡褐色で真土と粗土の2層からなる。表面に雲母粉あり。	26	25	12
22	Ⅱ Agカチ1(22)	表	1	全体が淡褐色の土1層からなり、表面にわずかに雲母粉あり。	56	36	30
23	Ⅱ Agカチ1(23)	表	1	表面は淡褐色の真土と下に同色の粗土の2層からなる。表面にわずかに雲母粉あり。【口絵(4-4)-20】	26	41	21
24	Ⅱ Agカチ1(24)	表	1	表面は淡褐色の真土と下に赤褐色の粗土の2層からなる。表面に灰色の埴汁の付着跡あり。	38	32	27
25	Ⅱ Agカチ1(25)	表	1	表面は2.1㎜の真土、下は5～20㎜の淡赤褐色の粗土の2層からなる。	28	22	22
26	Ⅱ Agカチ1(26)	－	1	全体が淡褐色の真土1層のみ。銭文は不鮮明。	26	31	14
27	Ⅱ Agカチ1(27)	裏	3	表面は淡褐色の真土、その下は赤褐色の粗土の2層からなる。表面にわずかに雲母粉がみえる。湯道とみられる跡がある。	55	48	14
28	Ⅱ Agカチ1(28)	－	3	全体が灰褐色の土1層からなる。	36	37	25
29	Ⅱ Agカチ1(29)	裏	2	全体が灰褐色の土1層からなる。	44	57	20
30	Ⅱ Agカチ1(30)	裏	2	表面は2㎜の淡褐色の真土、下は褐色の粗土の2層からなる。	53	48	27
31	Ⅱ Agカチ1(31)	裏	3	表面に汚れが付着。表面は2㎜の淡褐色の真土、下は灰褐色の粗土の2層からなり、銭文は不明。裏面に亀裂あり。【口絵(4-5)-21】	60	54	29
32	Ⅱ Agカチ1(32)	裏	2	表面は2～3㎜の淡褐色の真土、下に赤褐色の粗土の2層からなる。粗土に灰褐色の土が混入。表面は全体的に黒く、銭文はない。【口絵(4-5)-22】	65	57	34
33	Ⅱ Agカチ1(33)	裏	3	表面は1㎜程度の真土、下は淡褐色の粗土の2層からなる。【口絵(4-5)-23】	65	55	35
34	Ⅱ Agカチ1(34)	裏	1	表面は淡褐色の真土で、下は赤褐色の粗土の2層からなる。湯道とみられる跡があり。【口絵(4-5)-24】	73	65	31
35	Ⅱ Agカチ1(35)	－	1	表面は淡褐色の真土で、下は同色の粗土の2層からなる。側面に亀裂が入る。混入物多い。【口絵(4-5)-25】	38	34	29
36	Ⅱ Agカチ1(36)	裏	1	表面は淡褐色の真土で、赤褐色の粗土の2層からなる。側面に欠損あり。表面に赤褐色土が付着。【口絵(4-5)-26】	42	60	23
37	Ⅱ Agカチ1(37)	裏	1	表面は赤褐色の真土、下は同色の粗土の2層からなる。湯道とみられる跡あり。	36	42	23
38	Ⅱ Agカチ1(38)	裏	2	表面は赤褐色の真土、下は同色の粗土の2層からなる。銭文の凹凸が小さい。	39	36	19
39	Ⅱ Agカチ1(39)	－	－	全体が灰褐色の土1層からなり、銭文なく、湯道とみられる跡のみ残る。土には繊維が混入。	44	42	28
40	Ⅱ Agカチ1(40)	－	－	全体が灰褐色の土1層からなり、銭文なく、湯道とみられる跡のみ残る。	32	35	19
41	Ⅱ Agカチ1(41)	－	－	表面は灰褐色の薄い真土、下は灰色を帯びた淡褐色の粗土の2層からなる。	30	28	10
42	Ⅱ Agカチ1(42)	－	1	表面は灰褐色の薄い真土、下は灰色を帯びた淡褐色の粗土の2層からなる。表面に雲母粉が残る。	43	32	20
43	Ⅱ Agカチ1(43)	表	1	表面は灰褐色の真土、下は赤褐色の粗土の2層からなる。	46	29	18
44	Ⅱ Agカチ1(44)	－	－	表面は灰褐色の真土、下は赤褐色の粗土の2層からなる。表面に雲母粉が残る。	26	40	19
45	Ⅱ Agカチ1(45)	－	－	表面は灰褐色の真土、下は淡褐色の粗土の2層。裏面に欠損あり。	48	47	31

《鋳型の２層の構造》 No18：ⅡAg ｶﾁ 1（18）

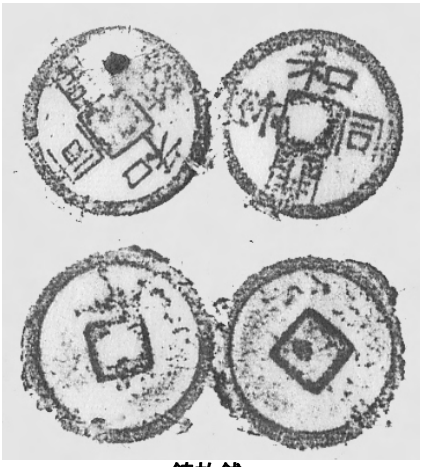
真土（肌土）層：
鋳型の表面には銭文をはっきりと出すため、非常に細かな土を使用しました。種銭を押し当てて鋳型をつくったと考えられます。

粗土層：
ガス抜けをよくするため、空気の通りやすい粗い土を使ったものと考えられます。粒子の大きい砂も混ざっています。

《湯道と銭文》（上）No1：ⅡAg ｶﾁ 1(1)　（下）No12：ⅡAg ｶﾁ 1(12)



銭貨と銭貨の間は、1～3㎜程度あけてつくられ、銭文の方向は湯道に対して一定ではなかったことがわかります。

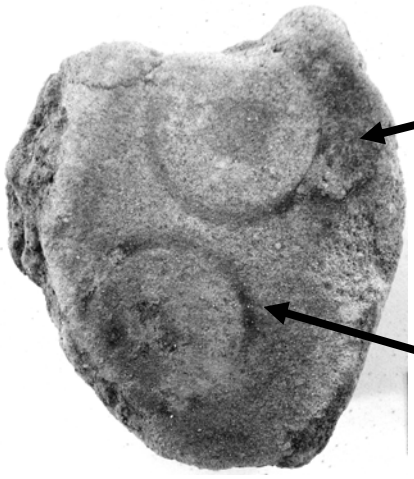


鋳放銭

貨幣博物館　貨幣目録(ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞ掲載)
和同開珎　画像編　No.247

2 連のまま切断されていない銭です。銭の向きが一定でなかったことがわかります。（【口絵 2】参照）

《裏用の鋳型》 No32：ⅡAg ｶﾁ 1(32)



表面が黒色化しています。黒味（油煙）と推定されます。

裏用の鋳型は表用の鋳型に比べて銭文が浅くなっています。

【貨幣博物館所蔵古代銭貨の計測データ－大きさ・重さとその成分－】

当館で所蔵している古代銭貨を並べると、時代を下るとともに大きさが小さくなることが見て取れます。
また、銭貨を成分分析することにより、その鋳造方法や原料の調達地を解明する手がかりを得ることができます。
当館所蔵の古代銭貨の計測データと成分分析のデータを紹介します。

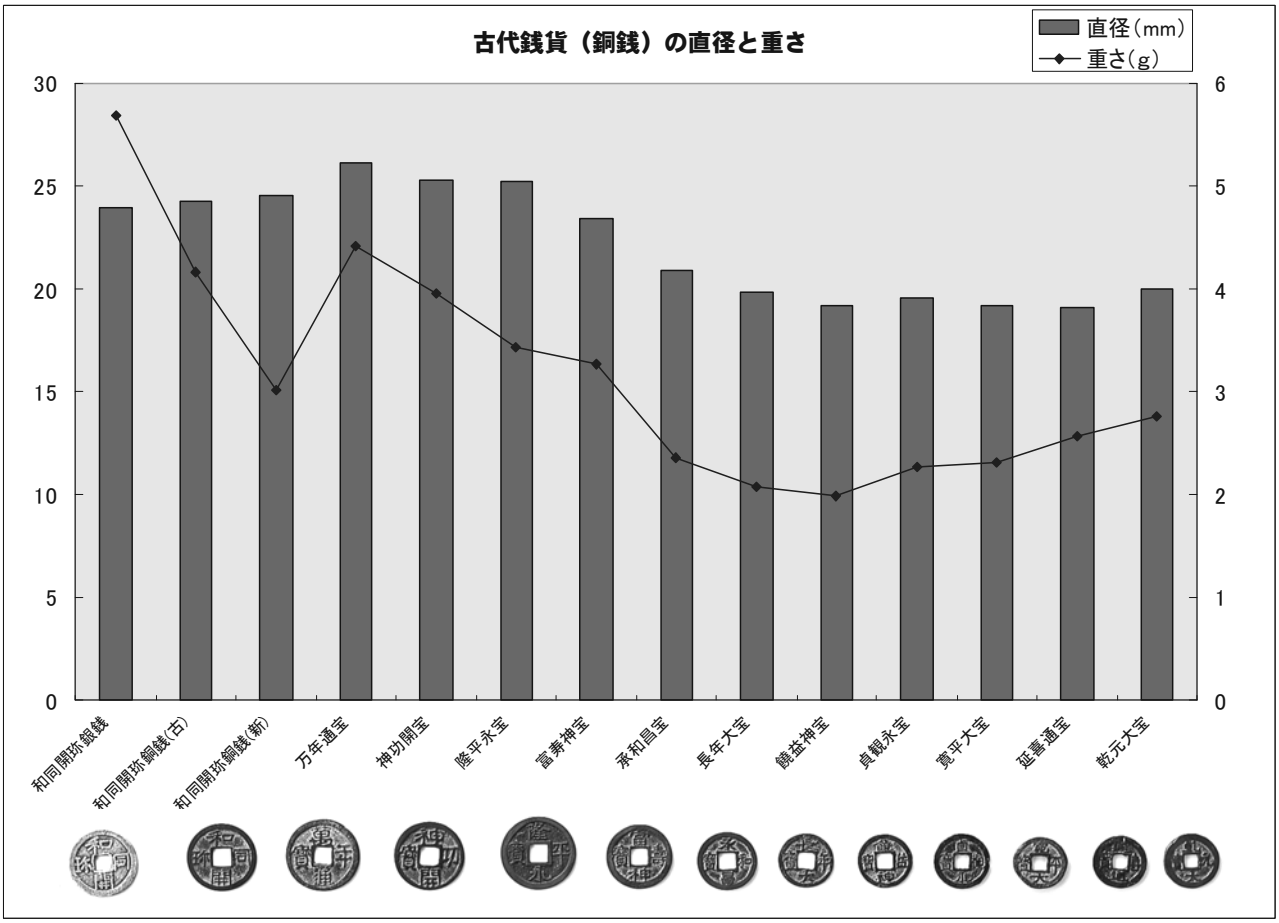
●貨幣博物館所蔵の古代銭貨の計測データ　－直径と重さ－

貨幣博物館では、所蔵する古代銭貨のうち、和同開珎銀銭 34 点、和同開珎銅銭（古）10 点、和同開珎銅銭（新）251 点、万年通宝 118 点、神功開宝 218 点、隆平永宝 108 点、富寿神宝 59 点、承和昌宝 38 点、長年大宝 29 点、饒益神宝 21 点、貞観永宝 49 点、寛平大宝 47 点、延喜通宝 42 点、乾元大宝 32 点、計 1,056 点を対象として直径、重さの計測を行っています。計測平均値からは、和同開珎・万年通宝・神功開宝がつくられた奈良時代にくらべ、それ以降の平安時代の 9 銭は直径・重さともに縮小化されているのがわかります。

※当館所蔵の和同開珎の詳細については、当館ホームページをご覧ください。和同開珎以降の古代銭貨の計測データの詳細についても2008年中にホームページでの公開を予定。

資料名	直径(mm)	重さ(g)
和同開珎銀銭	23.97	5.69
和同開珎銅銭(古)	24.25	4.16
和同開珎銅銭(新)	24.52	3.02
万年通宝	26.10	4.42
神功開宝	25.27	3.96
隆平永宝	25.20	3.43
富寿神宝	23.46	3.27
承和昌宝	20.92	2.35
長年大宝	19.84	2.07
饒益神宝	19.16	1.99
貞観永宝	19.55	2.28
寛平大宝	19.17	2.31
延喜通宝	19.10	2.56
乾元大宝	20.01	2.76

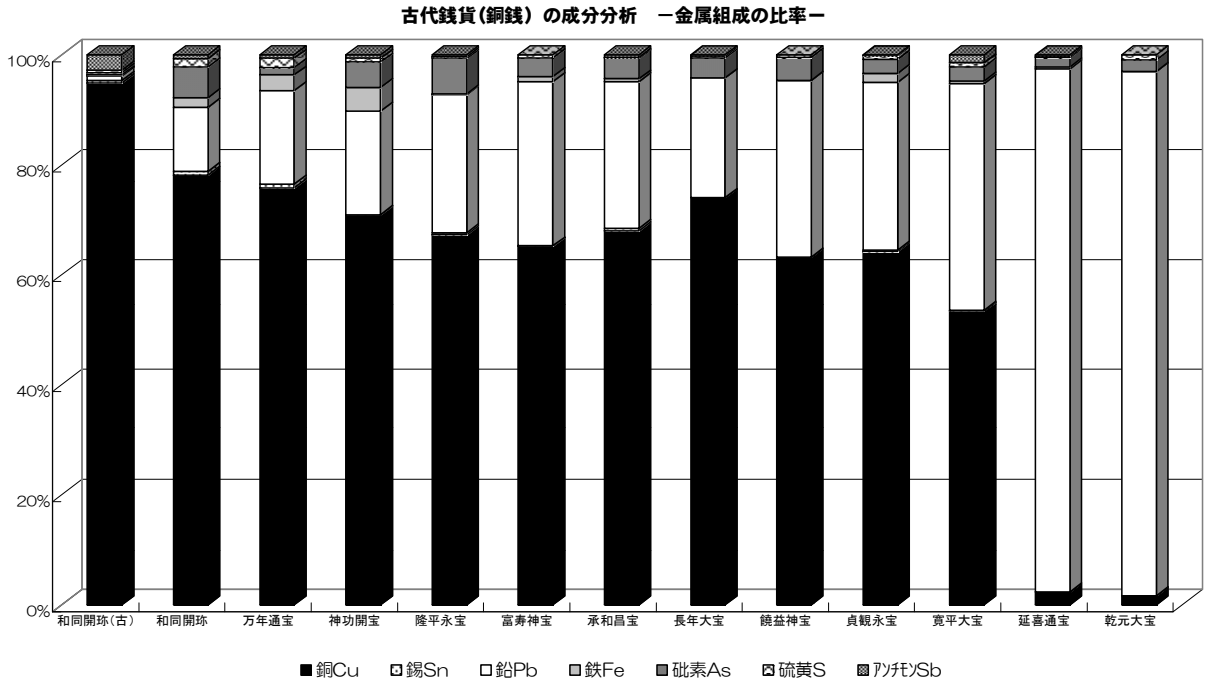
古代銭貨の計測平均値（当館所蔵資料）



●当館所蔵古代銭貨の金属組成分析データ

《古代銭貨の主な成分の変化－銅から鉛へ－》

古代銭貨の成分をみると、初めの頃は銅の比率が高いですが、後の時代になると鉛の比率が高いものが増えます。これは銅生産の減少によるものと考えられます。



当企画展に展示した古代銭貨各1点※の成分分析結果です。個体差はありますが、おおよその金属組成比率の傾向を示しています。

※和同開珎～隆平永宝については、国立歴史民俗博物館所蔵資料のデータ。詳しくは「古代銭貨に関する理化学的研究 ―「皇朝十二銭」の鉛同位体比分析および金属組成分析― 」／金融研究所Discussion Paper J-Series No.2002-J-30 2002.9（貨幣博物館ホームページよりダウンロード可能）参照。

《銭貨に用いられたアンチモン》

富本銭の成分分析をすると、銅のほかにアンチモンの含有率が高い（4～25%）ことがわかっています。これは鋳造時に銅の融点を下げ、流れを良くするためと考えられます。

また和同開珎も「古和同」と称される初期の種類は、アンチモンが含まれていることが明らかとなっています。その後の銭貨では、ごく一部にアンチモンが多いものがみられますが、これは富本銭や「古和同」を鋳潰して使用したことによると考えられています。

《古代銭貨の鉛の産地》

古代銭貨に含まれる鉛を分析すると、その原料の供給地の手がかりが得られます。

「新和同」と称されるタイプや万年通宝以降の銭貨は、長登や蔵目喜の鉱山（山口県）が主な原料の供給地であったことがわかります。

※鉛同位体の測定と分析については、「古代銭貨に関する理化学的研究 ―「皇朝十二銭」の鉛同位体比分析および金属組成分析― 」／金融研究所 Discussion Paper J-Series No.2002-J-30 2002.9（貨幣博物館ホームページよりダウンロード可能）を参照ください。

《分析データと発掘調査・史料との比較》

古代銭貨の鉛の供給地の1つと推定される長登銅山の発掘調査では、9 世紀ころから銅の生産が減り、鉛の生産が増加したと指摘されています。また、9 世紀の鋳銭司は、原料銅の不足を理由に、年間鋳銭額の減額をたびたび願い出ています。

分析データは、和同開珎以降、徐々に鉛の含有率が高まり、延喜通宝・乾元大宝が発行される 10 世紀の段階では、ほぼ鉛銭と呼べるような金属組成となることを示しています。これは、発掘調査や史料などが示す、9 世紀以降の原料銅が不足した状況と一致します。

＜付録＞

貨幣博物館所蔵和同開珎目録について

日本銀行金融研究所貨幣博物館の収蔵品は、「銭幣館コレクション」を母体としています。「銭幣館コレクション」には、貨幣・紙幣類はもとより、貨幣に関連する古文書、版本、絵図、漢籍、錦絵、道具類などの多様な資料が含まれています（コレクション由来については『銭幣館古文書目録』<当館ホームページ掲載>をご覧ください）。

そのうち古文書については、『銭幣館古文書目録』を 2000 年に発刊・公開しました。また銭幣館コレクションではありませんが、2002 年より当館で保存・公開することになった小分銅についても、2005 年企画展「黄金の分銅」の開催を機に、資料計測データを当館ホームページ（展示記録ページ）にて公開しました。これらに続き当館所蔵の銭幣館コレクションの貨幣についても、和同開珎の目録を手始めとして、当面、古代銭貨を対象に整理の終了したものを順次ホームページで公開していくこととしました。

古銭家はこれまで各種銭貨を銭文の字体の特徴・方孔の広狭などにより、詳細な分類を行なってきました。当館が所蔵する和同開珎をはじめとする古代銭貨についても、銭幣館での分類をもとに古銭学的な分類がなされており、そうした分類情報を広く紹介することを目的として、本目録を作成・公表することとしました。このため、本目録では、新たな分類や見直しは行わず、銭幣館より受け継いできた分類を生かす形で作成しました。

古代銭貨史については、富本銭が奈良県明日香村飛鳥池遺跡で大量発掘されたことを契機に、学会での議論が高まっています。松村恵司氏により江戸時代以来の古代銭貨史を整理した論考（「日本初期貨幣研究史略：和同開珎と富本銭・無文銀銭の評価をめぐって」金融研究第 24 巻第 1 号、2005 年 3 月＜金融研究所ホームページよりダウンロード可＞）が発表されるなど、古代銭貨史研究は新たな段階を迎えようとしています。同論文でも和同開珎の古銭学的分類の研究史について言及され、当館の分類の元となっている田中啓文氏による分類についても触れられています。

今後、考古学の発掘調査の成果などをもとに研究が進展していくうえで、本目録がその一助となれば幸いです。

（公開日：2007.12.7）

※本冊子では、計測値の種類ごとの概要等を纏めた和同開珎目録の解題部分を掲載いたします。各資料の計測データや画像については、当館ホームページをご覧ください。

・資料の計測に使用した機器

電子ノギス：ABS ソーラ式デジマチックキャリパ 500-445（最小表示量 0.01mm,株式会社ミツトヨ製）
文字面厚測定器：デジマチックキャリパゲージ CGDO-25K（最小表示量 0.01mm,株式会社ミツトヨ製）
電子はかり：音叉式多機能電子はかり HG2000 （最小表示単位 0.01g,新光電子株式会社）

当館所蔵和同開珎目録解題より

貨幣博物館　関口かをり

１．はじめに

日本銀行金融研究所貨幣博物館では和同開珎を全310点所蔵しており、うち309点が銭幣館コレクションから引き継がれた資料、1点（個体ID263）は甲賀宣政氏が収集整理していたものである。

銭幣館コレクションを母体とする当館所蔵貨幣は、整理の過程で順次「登録簿」（日本銀行内部管理のための台帳）を作成してきた。和同開珎の登録簿は、田中啓文氏に師事した郡司勇夫氏*が作成にあたっている。当館の登録簿は、田中氏の分類の考え方を基本的に引き継いだ形で作成されていることが、雑誌『銭幣館』の田中啓文氏の論文などから確認できる。なお、和同開珎の登録簿の作成は1962年である。

以下、当館登録簿の分類方法および計測データについて述べる。また、あわせて本解題で、当館所蔵の銭幣館拓本資料における分類も紹介することとしたい。

*郡司勇夫氏－1910年～1997年。田中啓文氏に師事し、日本銀行が田中啓文氏のコレクションを譲り受けたことに伴い、日本銀行へ入る。『図録　日本の貨幣』（東洋経済新報社）の出版、貨幣博物館の開館に携わる。日本貨幣協会名誉会長。

２．郡司勇夫氏による当館登録簿分類

（1）当館登録簿大分類について

郡司勇夫氏による当館登録簿では、和同開珎全310点について、銀銭か銅銭か、鋳造が古鋳か否かにより、大きく4分類し、次のように特徴を解説している（以下、要点を抜粋）。

①**和同開珎銀銭（古鋳）**ⅡAアス1…34点（当館所蔵点数、以下同様）

径寸、厚味、重量共にやや不統一な点があり、文字製作共に古朴。「和」の口の縦画が下つぼまりになっている。異例はあるが多くは不隷開（「開」の字が楷書体―筆者注）。

内郭の大きさは広・狭の2種。文字には繊細な変化が多く、径寸、重量、厚みなどの相違点から鋳造技術の拙劣さと、手工業的な小規模な鋳造であったことが伺える。

②**和同開珎銅銭（古鋳）**ⅡAアス2…10点

①に同様。

③**和同開珎銀銭**ⅡAアス3　　…7点

古鋳品に比べ銭容整い、文字に個体差があまり見られない。「和」の口が古鋳品と同様両つぼまり、「同」の第一、二画がすそ広がり。「珎」の第6画が肩上がり気味。

④**和同開珎銅銭**ⅡAアス4　…259点

古鋳銭に比べ、銭容整い、文字に個体差も比較的少ない。「古和同様」の7点以外は「和」の口が古鋳銭と異なり矩形気味。全て隷開（「開」の字が隷書風―筆者注）。

（2）当館登録簿小分類について

細分類については、登録簿の分類解説を第1表に掲げた。近世以来古銭家により様々な分類がなされてきたが、基本的な分類は既にある程度集約されている。当館登録簿の小分類も、大分類で掲げた事項以外については、それらと大きな隔たりはない。

なお登録簿には、「新和同」銅銭の細分類に関し、”収集界で「新和同」と呼ばれるものは鋳造期間が長く、細別するのは限りがないため、第1表の分類にとどめた”旨注記がされている。例として掲げられている第1表以外の「新和同」の細分類は以下の通りである。

「背広郭」…裏面の郭が広く、やや広穿。
「背凸郭」…裏面の郭が常品に比して凸出している。
「背異制」…裏面の郭の状態が、万年銭や神功銭など和同銭の後に出された諸銭の郭の状態に似ている。
「最大様」…極めて大形、厚肉のもので保存唯一品の異種。
「円頭開」…開字の上部が円味を帯びている。

第１表 和同開珎 細分類 (郡司勇夫氏による当館登録簿より)

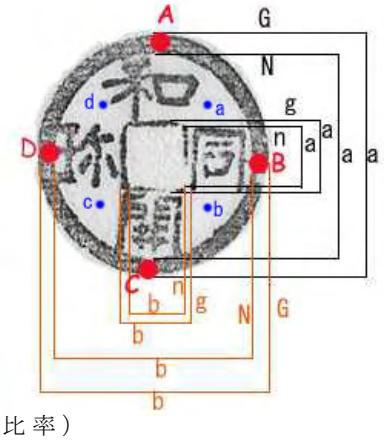
材質	種別	特徴	当館所蔵点数
銀	狭穿大字	・狭穿 ・文字濶大。特に「珎」が狭穿小字に比べ大きい。	4
銀	狭穿小字	・狭穿 ・文字が「狭穿大字」に比べ小さい。	18
銀	笹手	・狭穿 ・各字縦画末端が笹葉のように下すぼみ。笹書ともいう。 ・稀少	3
銀	広穿	・広穿のため、文字が狭穿よりやや小さい。	4
銀	広穿隷開	・広穿 ・「開」が隷書風（隷開）。	5
		和同開珎銀銭（古鋳） 小計	*34*
銅	狭穿	・狭穿 ・文字が比較的大きい（個体ID39 のような小字のものもある）。	5
銅	笹手	・狭穿 ・各字縦画末端が笹葉のように下すぼみ。笹書ともいう。	1
銅	広穿	・広穿 ・文字が比較的大（やや小さいものもある）。	2
銅	広穿隷開	・広穿 ・「開」が隷書風（隷開）。 ・文字がやや小さい。	2
		和同開珎銅銭（古鋳） 小計	*10*
銀	古和同様	・広穿 ・「開」が隷書風（隷開）。 ・「和」の口が下すぼみ。 ・「珎」の第6画が肩上がり気味。 ・「同」の縦画が開き気味。 ・古和同に似通っている点があるがやや製作精美。 *収集界では隷開和同と区分されているが、誤解されやすいため「古和同様」とした。	4
銀	古和同様閉戸	・古和同様に同じであるが、「開」の隷書風部分を造型後に故意に修正したもの（古和同の不隷開にならったものと考えられる）。 ・稀少	3
		和同開珎銀銭 小計	*7*
銅	古和同様	・「開」が隷書風（隷開）。 ・「和」の口が下すぼみ。 ・「珎」の第6画が肩上がり気味。 ・古鋳銭に似通っている点があるがやや製作精美。 *収集界では隷開和同と区分されているが、誤解されやすいため「古和同様」とした。	6
銅	普通品	・製作精美 ・「和」の口がやや横長（古和同、古和同様と異なる）。 ・天平以降のものとされ「天平和同」とも。	206
銅	小珎	・「珎」が他3字に比し小さい。 ・「珎」第6画が内郭に接するのが通例。	11
銅	長珎	・「珎」の第7画が特に長い。 ・「開」の門の縦画がやや開き気味。 *従来末期のものと見られていたが、S31年群馬県出土のものは精美であり、天平期のものとしてよいであろう。	4
銅	隆和	・「和」の第3画がやや短い、 第5画がやや長い、口がやや内郭寄りに下がる。	7
銅	巨字	・4字とも巨大。「濶字」ともいう。 ・製作は不精美。 ・稀少	3
銅	四跋	・「和」の第3画,「同」の第2画,「開」の第6画,「珎」の第7画の末端が跳ねている。 ・濶縁 ・4文字共小さい。 ・稀少	7
銅	三跋	・「和」の第3画,「同」の第2画,「珎」の第7画の末端が跳ねている。 ・細縁 ・文字は大きい。	2
銅	木	・「和」第2画が肩上がり気味。 ・「和」第5画がやや長く、口が幅が狭く大きい。 ・稀少	11
銅	濶縁小字	・濶縁 ・文字は小さい。 ・四跋に似ているが、跳ねていない。	2
		和同開珎銅銭 小計	259
		合計点数	*310*

３．計測データの分析と古銭学分類の整合性

（１）計測方法

貨幣の計測方法については、奈良国立文化財研究所が平城京左京一条三坊の発掘調査で出土した銅銭の測定に適用した測定方法（奈良国立文化財研究所学報第23冊 『平城宮発掘調査報告VI 平城京左京一条三坊の調査』1974年）を準用した。

外縁外径G＝(Ga＋Gb)／2
外縁内径N＝(Na＋Nb)／2
内郭外径g＝(ga＋gb)／2
内郭内径n＝(na＋nb)／2
縁厚T＝(A＋B＋C＋D)／4
内厚(文字面厚)t＝(a+b+c+d)／4



また縁幅比・孔径比については岡田茂弘「和同開珎銀銭について」(『郵政考古紀要21』1995年)を準用した。
縁幅比＝〔(G－N)／2〕／N(外縁の直径に対する外縁の幅)
孔径比＝n／N (外縁の直径に対する内郭の方孔の大きさの比率)

＊外縁外径は製作の仕上工程での研磨や、使用上の摩滅があるため、同じ銭笵や鋳型を用いていても個体差がある。そのため外縁内径をあわせて計測した。
＊なお、重量以外は平均値を採っているため各値小数点第3位を四捨五入した値を目録に掲載した。

(２) 計測データ　―大分類

第２表　　４分類の計測値比較

注）二連のもの、破片については平均値には含まれない。そのため上記表内の点数は目録上より少ない。

平均値	点数	外縁外径 (mm)	外縁内径 (mm)	縁幅比	内郭外径 (mm)	内郭内径 (mm)	孔径比	縁厚 (mm)	内厚 (mm)	量目 (g)
古銀	33	23.97	19.23	0.12	7.45	5.78	0.30	1.68	0.95	5.69
古銅	10	24.25	19.32	0.13	7.53	6.17	0.32	1.61	1.01	4.16
後銀	7	24.62	20.55	0.10	8.22	6.80	0.33	1.56	0.73	4.91
後銅	252	24.52	20.59	0.10	8.08	6.38	0.31	1.36	0.55	3.02
全体	302	24.46	20.40	0.10	8.00	6.31	0.31	1.41	0.61	3.40

最小値	点数	外縁外径 (mm)	外縁内径 (mm)	縁幅比	内郭外径 (mm)	内郭内径 (mm)	孔径比	縁厚 (mm)	内厚 (mm)	量目 (g)
古銀	33	22.68	18.03	0.09	6.53	4.55	0.23	1.31	0.36	2.79
古銅	10	22.95	18.70	0.09	6.72	5.03	0.27	0.93	0.68	2.85
後銀	7	23.92	20.13	0.08	7.83	6.19	0.31	1.40	0.58	3.96
後銅	252	22.32	18.57	0.05	7.28	5.28	0.27	0.88	0.25	1.57
全体	302	22.32	18.03	0.05	6.53	4.55	0.23	0.88	0.25	1.57

最大値	点数	外縁外径 (mm)	外縁内径 (mm)	縁幅比	内郭外径 (mm)	内郭内径 (mm)	孔径比	縁厚 (mm)	内厚 (mm)	量目 (g)
古銀	33	25.16	20.52	0.17	9.05	6.94	0.34	2.07	1.50	7.27
古銅	10	25.02	20.09	0.16	8.38	6.89	0.35	1.98	1.48	5.79
後銀	7	25.69	21.52	0.11	8.53	7.12	0.35	1.68	0.84	5.54
後銅	252	25.98	21.60	0.16	8.90	7.27	0.38	2.22	1.35	6.25
全体	302	25.98	21.60	0.17	9.05	7.27	0.38	2.22	1.50	7.27

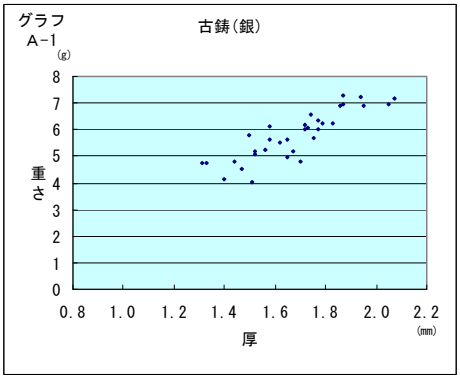
登録簿の大分類(4類)の平均・最小・最大値を第2表に掲げ、各個体の計測結果をグラフA～Dに示した。

これらをみると縁厚・内厚、量目については、従来言われているように、銀・銅銭とも古鋳の方が厚みがあり、重い。外縁・内郭の値についても、古鋳の銀・銅銭は、後鋳のものに比して小さい。

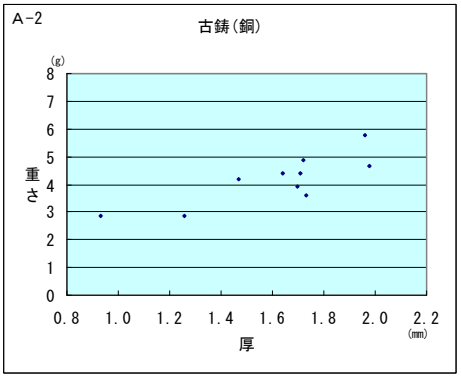
こうした計測結果をみても、後鋳のものは、古鋳に比べ縁厚・内厚が薄くなるなど銭容が整っており、鋳造技術が進歩していることが窺われる。特に銅銭については後鋳の内厚が古鋳の約半分となっている。

なお、試験的に当館所蔵寛永通宝の内厚を計測したところ、古寛永4種×5点計20点の平均が0.55mm、新寛永2種×10点計20点の平均が0.60mmであり、和同開珎後鋳銭の段階で既に銭貨鋳造技術は一定の水準に達していたと考えられる。

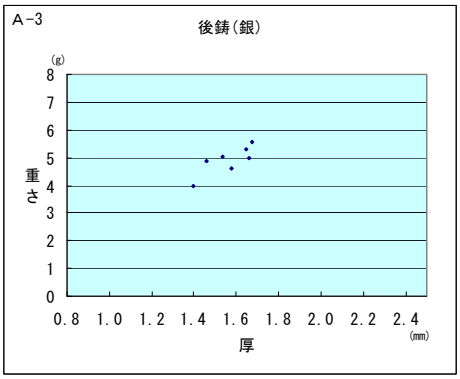
グラフ
A-1



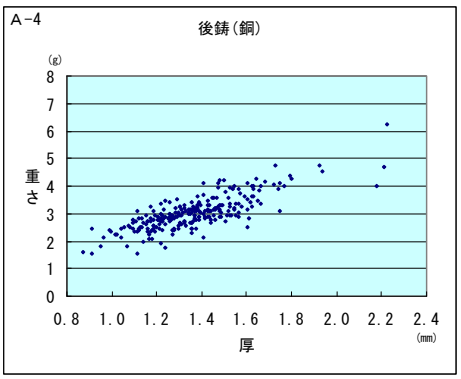
A-2



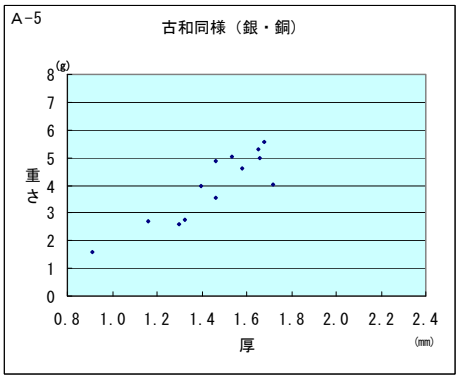
A-3



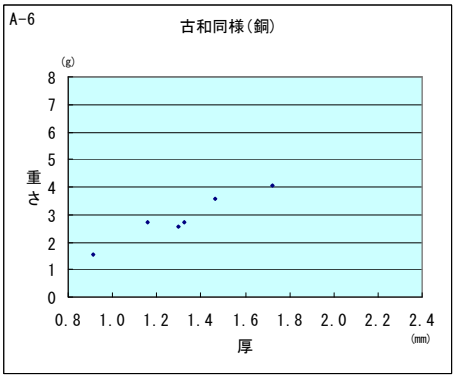
A-4



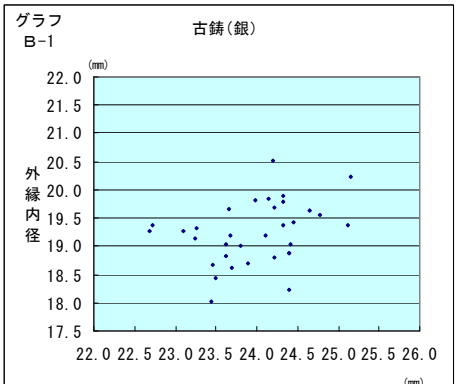
A-5



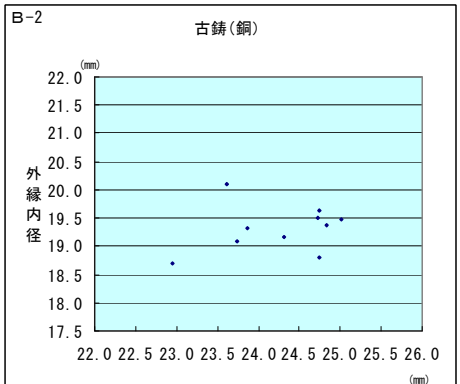
A-6

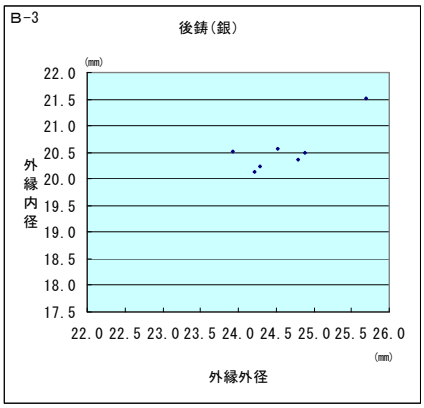


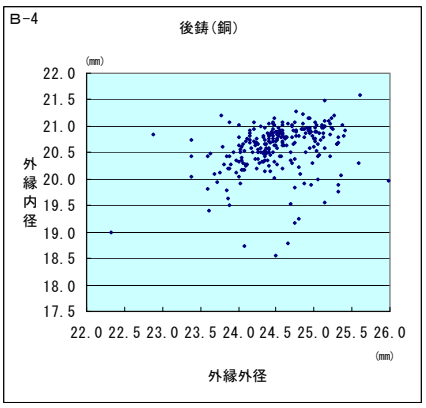
グラフ
B-1

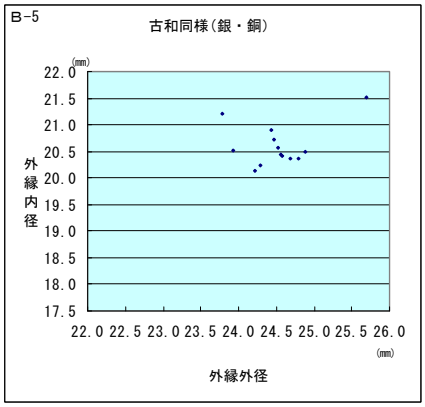


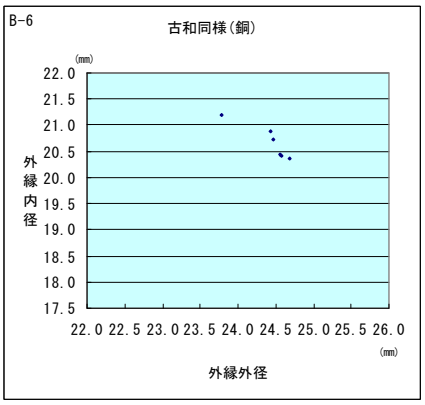
B-2

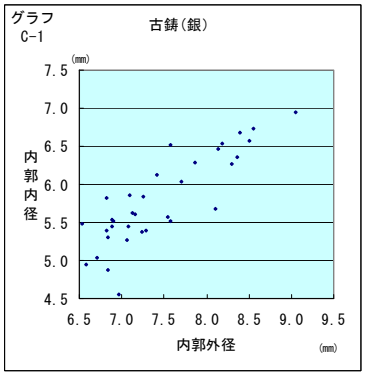


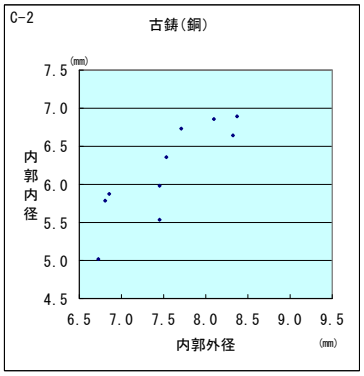

B-3
後鋳(銀)
(mm)
22.0
21.5
21.0
20.5
20.0
19.5
19.0
18.5
18.0
17.5
外縁内径
22.0 22.5 23.0 23.5 24.0 24.5 25.0 25.5 26.0
(mm)
外縁外径

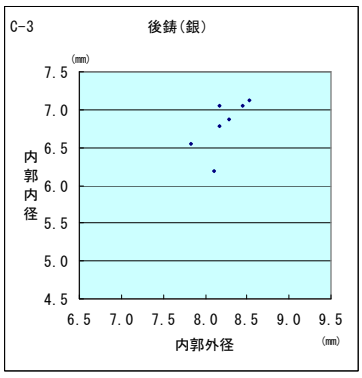

B-4
後鋳(銅)
(mm)
22.0
21.5
21.0
20.5
20.0
19.5
19.0
18.5
18.0
17.5
外縁内径
22.0 22.5 23.0 23.5 24.0 24.5 25.0 25.5 26.0
(mm)
外縁外径

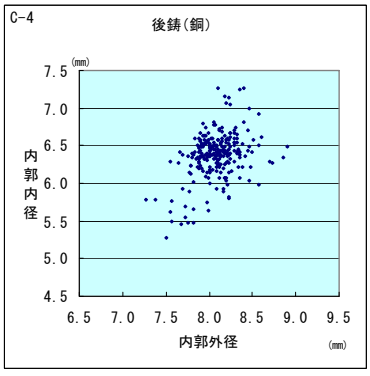

B-5
古和同様(銀・銅)
(mm)
22.0
21.5
21.0
20.5
20.0
19.5
19.0
18.5
18.0
17.5
外縁内径
22.0 22.5 23.0 23.5 24.0 24.5 25.0 25.5 26.0
(mm)
外縁外径

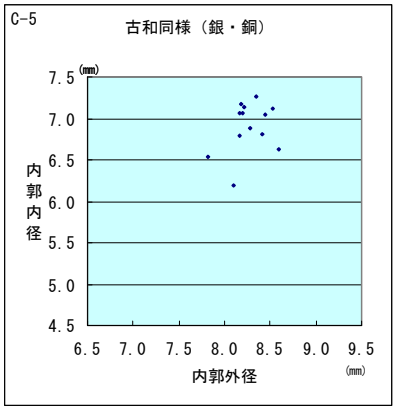

B-6
古和同様(銅)
(mm)
22.0
21.5
21.0
20.5
20.0
19.5
19.0
18.5
18.0
17.5
外縁内径
22.0 22.5 23.0 23.5 24.0 24.5 25.0 25.5 26.0
(mm)
外縁外径

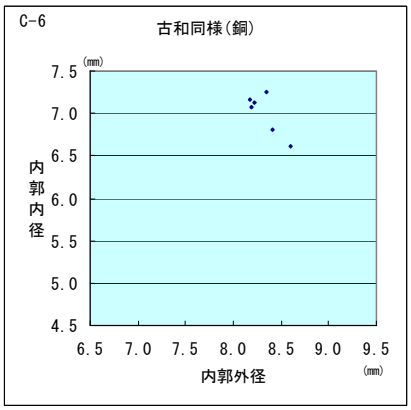

グラフ
C-1
古鋳(銀)
(mm)
7.5
7.0
6.5
6.0
5.5
5.0
4.5
内郭内径
6.5 7.0 7.5 8.0 8.5 9.0 9.5
内郭外径
(mm)

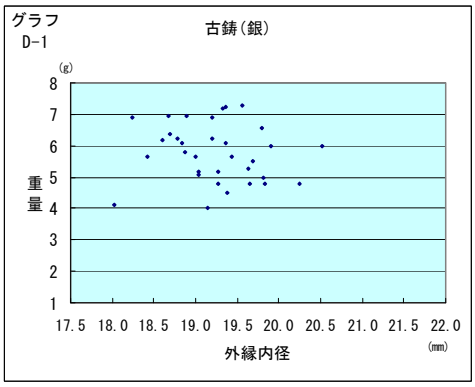

C-2
古鋳(銅)
(mm)
7.5
7.0
6.5
6.0
5.5
5.0
4.5
内郭内径
6.5 7.0 7.5 8.0 8.5 9.0 9.5
内郭外径
(mm)

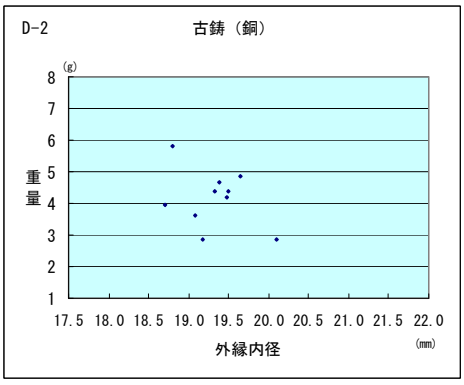

C-3
後鋳(銀)
(mm)
7.5
7.0
6.5
6.0
5.5
5.0
4.5
内郭内径
6.5 7.0 7.5 8.0 8.5 9.0 9.5
内郭外径
(mm)

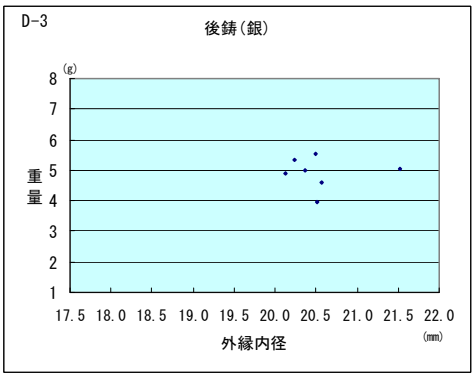

C-4
後鋳(銅)
(mm)
7.5
7.0
6.5
6.0
5.5
5.0
4.5
内郭内径
6.5 7.0 7.5 8.0 8.5 9.0 9.5
内郭外径
(mm)

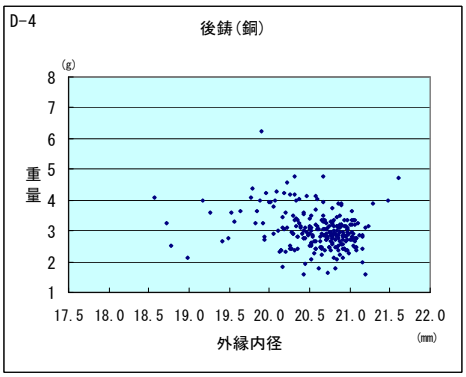

C-5
古和同様（銀・銅）
(mm)
7.5
7.0
6.5
6.0
5.5
5.0
4.5
内郭内径
6.5 7.0 7.5 8.0 8.5 9.0 9.5
(mm)
内郭外径

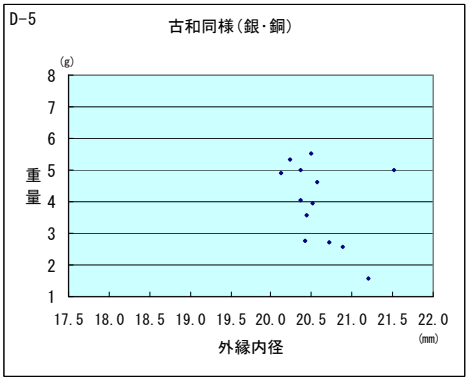

C-6
古和同様(銅)
(mm)
7.5
7.0
6.5
6.0
5.5
5.0
4.5
内郭内径
6.5 7.0 7.5 8.0 8.5 9.0 9.5
(mm)
内郭外径

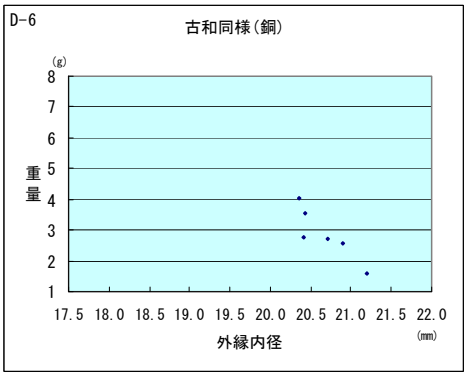

グラフ
D-1
古鋳(銀)
(g)
8
7
6
5
4
3
2
1
重量
17.5 18.0 18.5 19.0 19.5 20.0 20.5 21.0 21.5 22.0
(mm)
外縁内径


D-2
古鋳（銅）
(g)
8
7
6
5
4
3
2
1
重量
17.5 18.0 18.5 19.0 19.5 20.0 20.5 21.0 21.5 22.0
(mm)
外縁内径


D-3
後鋳(銀)
(g)
8
7
6
5
4
3
2
1
重量
17.5 18.0 18.5 19.0 19.5 20.0 20.5 21.0 21.5 22.0
(mm)
外縁内径


D-4
後鋳(銅)
(g)
8
7
6
5
4
3
2
1
重量
17.5 18.0 18.5 19.0 19.5 20.0 20.5 21.0 21.5 22.0
(mm)
外縁内径


D-5
古和同様(銀･銅)
(g)
8
7
6
5
4
3
2
1
重量
17.5 18.0 18.5 19.0 19.5 20.0 20.5 21.0 21.5 22.0
(mm)
外縁内径


D-6
古和同様(銅)
(g)
8
7
6
5
4
3
2
1
重量
17.5 18.0 18.5 19.0 19.5 20.0 20.5 21.0 21.5 22.0
(mm)
外縁内径

なお、「古和同様」についてみると、後鋳の銀銭は、全て「古和同様」または「古和同様閉戸」であり、前述の通り、縁厚・内厚や量目などの計測結果(平均値)が古鋳銀銭と異なることを示している。また「古和同様」銅銭の計測結果は「(3)計測データ―小分類」で示しているが、縁厚・量目の平均値はそれぞれ1.31mm、2.87gと、古鋳銅銭と明らかに異なり、後鋳銅銭に近いものとなっている。

(3)計測データ　―小分類

小分類の計測データの平均値は第3表にまとめた。種類により、計測データに多少の傾向が認められるが、その傾向が示す意味が、鋳造地や技術等の相違によるものであるかどうかは今後の課題である。

・古鋳：狭穿・広穿

古鋳の銀銭・銅銭のなかで狭穿・広穿と分類されているものは、第3表にあるように孔径比の平均が狭穿0.29～0.30、広穿0.33～0.35と計測値上で、分類の妥当性を示しているように見える。

しかし、内郭内径が狭穿の平均値が5.5mm前後、孔径比が約0.29であるのに対し、個体ID13・39などは狭穿と分類されているが、内郭内径約6.5mm、孔径比0.33と、古鋳の広穿に分類されて然るべき計測値を示している。登録簿の古銭学的分類を一部再検討する必要もあろう。

・後鋳：四跋・禾・濶縁小字

後鋳の銅銭で分類されているこれらはいずれも、縁幅比平均が0.13以上で濶縁であった。それぞれ字体による分類であり、計測による銭種との関係は明確にはし難いが、後述[補足-1]に触れる和同開珎の成分分析結果によると、これら濶縁のものは錫に比して鉛を多く含有している。同論文では、濶縁の和同開珎は晩鋳のものと考えられてきており、銭種分類と分析結果にはある程度の相関性を認めることができると述べられている。

成分分析についてはサンプルの数が限られていたため、今後更なる分析が必要であろう。

第３表　　細分類の平均値

	細分類	点数	外縁外径 (mm)	外縁内径 (mm)	縁幅比	内郭外径 (mm)	内郭内径 (mm)	孔径比	縁厚 (mm)	内厚 (mm)	量目 (g)
古銀	狭穿大字	4	23.44	19.23	0.11	7.04	5.49	0.29	1.70	1.18	5.91
	狭穿小字	17	24.01	19.09	0.13	7.19	5.54	0.29	1.70	0.93	5.76
	笹手	3	23.67	18.77	0.13	6.97	5.41	0.29	1.70	1.08	5.92
	広穿	4	24.70	19.98	0.12	8.51	6.58	0.33	1.60	1.01	5.86
	広穿隷開	5	23.83	19.41	0.12	8.17	6.47	0.33	1.65	0.71	5.02
古銅	狭穿	5	24.09	19.05	0.13	7.20	5.76	0.30	1.61	1.07	4.12
	笹手	1	24.83	19.39	0.14	6.80	5.79	0.30	1.98	1.17	4.67
	広穿	2	24.19	19.87	0.11	8.01	6.69	0.34	1.49	0.88	3.86
	広穿隷開	2	24.44	19.40	0.13	8.24	6.87	0.35	1.56	0.94	4.31
後銀	古和同様	4	24.33	20.34	0.10	8.19	6.68	0.33	1.55	0.78	4.93
	古和同様閉戸	3	25.01	20.81	0.10	8.26	6.97	0.33	1.59	0.67	4.88
後銅	古和同様	6	24.41	20.67	0.09	8.32	7.01	0.34	1.31	0.47	2.87
	普通品	201	24.52	20.67	0.09	8.09	6.41	0.31	1.34	0.53	2.95
	小珎	11	24.46	20.72	0.09	8.13	6.35	0.31	1.31	0.51	2.91
	長珎	4	24.31	20.40	0.10	8.26	6.27	0.31	1.33	0.59	3.18
	降和	7	24.35	20.71	0.09	7.96	6.39	0.31	1.35	0.62	2.91
	巨字	3	24.76	21.02	0.09	8.13	6.35	0.30	1.80	0.87	3.80
	四跋	7	25.05	19.70	0.14	7.79	5.79	0.29	1.63	0.61	3.78
	三跋	2	23.80	19.72	0.10	7.33	5.78	0.29	1.29	0.58	2.74
	禾	9	24.39	19.48	0.13	7.95	5.95	0.31	1.44	0.77	3.66
	濶縁小字	2	25.46	20.11	0.13	8.11	5.95	0.30	1.94	0.86	4.80
全体の平均		302	24.46	20.40	0.10	8.00	6.31	0.31	1.41	0.61	3.40

４．当館所蔵資料の古銭学的分類の変遷

(1)当館登録簿の分類と「古和同」「新和同」との関連

以上のように登録簿では、古鋳か否か、材質が銀か銅かにより4区分され、収集界での「古和同」「新和同」という名称は付されていない。ただし、登録簿中の解説では、「収集界での古和同」に該当するものは、大分類のうち①②(古鋳)全点と、③④のなかで「古和同様」、「古和同様閉戸」と細分類(第1表)されているもの(つまり③は全点、④のうちの6点)である、と付記されている。

一般に、「古和同」(ほぼ当館「古鋳」に該当)とされているものは不隷開(「開」字が楷書体)で、「新和同」(ほぼ当館「後鋳」に該当)とされているものは隷開(「開」字が隷書風)とされている。また新和同の銀

銭は存在しないとされている。

当館分類において、古鋳ではない(つまり後鋳の)銀銭が分類されているのは、「古和同様」分類の存在による。「古和同様」は、後述するように、いわゆる「新和同」の銀銭として分類されているわけではない。

ここで「古和同様」と分類しているものは、「開」が隷書風で、古鋳銭に似通っているがやや製作精美なものであり、収集界で「隷開和同」と称されているものである。後鋳のもの、あるいは「新和同」とされているものが全て隷開であるため、「隷開和同の呼称は、不適格で誤り易い」として「古和同様」*という名称を用いている。また、隷開であった部分を真書の「開」に故意に修正したものが3点みられるとし、これを「古和同様閉戸」と称し、「古鋳銭の不隷開に倣ったものであろう。」としている。

①②のなかにも隷開(広穿)のものが計8点みられるが、これらは古鋳に分類される。これは③④の古和同様の隷開は第1表で示したように「古和同に似通っている点があるがやや製作精美」なものである一方、①②に分類される隷開は字体が隷開であるが、鋳造技術は他の古鋳銭と同じであることによる。

*なお「古和同様」は、後述するように田中啓文氏の命名による。

(2)郡司勇夫氏の見解

当館登録簿の分類は郡司氏によるものであるが、郡司氏の見解を資料と紐付けて公に記したものとして『図録日本の貨幣』第1巻(東洋経済新報社、1972年)の図版解説があげられる。

この図版解説では、和同開珎全体を「初期のものは収集界で「古和同」と呼ばれている」とした後、「和同開珎銀銭(古鋳)」「和同開珎銅銭(古鋳)」を紹介し、「和同開珎銅銭(後鋳)」の項で「後鋳の和同開珎は収集界で「新和同」と呼ばれる。」として、古鋳の銀・銅銭と後鋳の銅銭の3種類に分類している。同書には当館所蔵の和同開珎19点の写真が掲載されており、そのうち当館登録簿分類での「古和同様」銀銭の写真が2点(個体ID46・49)、銅銭が1点(個体ID52)掲載されているが、これらは登録簿と異なり古鋳に分類している。

一例をあげると、個体ID46について「「開」字が隷書風になっているが、銭体がやや整い、「新和同」と呼ばれる後鋳のものに似ている。」と解説しながらも、古鋳に分類している。

また同氏の著書『日本貨幣図鑑』(東洋経済新報社、1981年)では、この古和同様について次のように明確な見解を述べている。

> 「銀銭　(中略)これ(本目録上「古和同様」—筆者注)を収集界で「隷開和同」とし、一部では古和同の範疇としているが、筆者はむしろ新和同にすべきものと思っている。この隷開和同の類には製作時に「開」字の部分を「不隷開」に修正したものが稀に存在している。隷開和同は裏面の銭容からも古和同と相違していることが認められるものである。」
>
> 「銅銭　(中略)これ(本目録上「古和同様」—筆者注)は新和同に属すべきものであるが、銅質は古和同に近いものであり、製作の上で中間的なものといえよう。」

つまり郡司氏は、「古和同様」(および「古和同様閉戸」)を古和同・新和同の中間的なものと捉えていた。しかし強いて分類するのであれば、新和同に近いであろうとの見解を当館登録簿および『日本貨幣図鑑』で示したものである。

(3)田中啓文氏の見解　～『銭幣館』より

田中啓文氏も古和同について詳細に述べた最後の論考「鑑定上からみた古和同銭の鋳造年代」(『銭幣館』11号、1951年)において、和同開珎分類の見解を述べており、その見解は郡司勇夫氏による当館登録簿にも反映されているので簡単に紹介する。

氏は同論考で、古和同(銀・銅)は「帯黒暗褐色、見た感じはねばりのある金(かね)、製作は渾重・朴納」、新和同(銅のみ)は「いわゆるカラカネで中には帯灰白色のものもあるが「銭特有の金」である、製作は軽妙・整然」とまず大きく分類をしている。

その上で、「古和同様」について、項を改め当目録銀銭個体ID49(『銭幣館』ではC-6)と銅銭56(『銭幣館』C-5)の拓本を掲げ、「鋳銭技術に進歩した点は認められるが手法も〈銅銭については〉銅質も古和同の系統」(〈〉内筆者)であるとしている。しかし、鋳造技術については「格段の進歩が認められる」と評価し、古和同銭とは大きく区別している。「隷開和同」の名称については、古和同の隷開(広穿)とは区別が必要との見解からも、批判的な書き方である。この論文では記されていないが、「古和同様」と命名し、郡司氏も当館登録簿において引き継いでいる(郡司勇夫氏「私の見た銭幣館主田中啓文先生第20回」『ボナンザ』1972年6月号)。

ここで拓本に掲げられている当目録個体ID49(『銭幣館』C-6)は、先述の「古和同様閉戸」であり、これについても『銭幣館』では「隷開をわざわざ不隷開に改修したもの」「母銭で銭形を印した銭型の「開」字をキリのように先のとがったものでホジクって改修して、その銭笵で鋳造されたものである。」としている。

なお、和同開珎の分類については、常にその鋳造年代と共に議論されてきたが、田中氏は、古和同銭を和銅元年以前に鋳造されたもの、この隷開(登録簿上「古和同様」および「古和同様閉戸」)は和銅

元年鋳造とし、古和同銭と新和同銭との中間的なものとして独立させ、鋳造期を画している。

ただし和同開珎の鋳造年代については飛鳥池遺跡の発見などにより、7世紀後半の銅銭の実態が解明されつつあり、初期貨幣研究は新たな研究段階へ入った(古代銭貨研究史については、松村恵司「日本初期貨幣研究史略:和同開珎と富本銭・無文銀銭の評価をめぐって」金融研究第24巻第1号、2005年3月に詳しい)。そのため、前掲田中啓文氏の論文の年代に関する見解について、ここで議論するものではないが、同氏が古和同と古和同様について鋳期を区分していたことを記しておきたい。

(4)銭幣館拓本資料の分類

当館では銭幣館所蔵貨幣の主な貨幣を拓本にとったとみられる拓本資料を所蔵している(現在整理中)。これは「銭幣館」と印刷された和紙に拓本が付されたもので、綴られておらず、奥付等もないため、当資料の作成年は不明である(全丁数183うち9丁が和同開珎の拓本)。

和同開珎については計147点の拓本が付されており、一部拓本の側に「外○点」と書き込まれた点数を合計すると248点となる。さらに、欄外にメモされた点数(第4表下段参照)6点を合わせると254点となり、この資料を作成した時点で田中啓文氏が所蔵していた和同開珎全点とも考えられるが定かではない。

この和同開珎の拓本と当館所蔵資料を照合した結果、拓本全147点中127点は当館所蔵資料と一致した(一致した資料については、目録上備考欄に記載し、拓本の画像を掲載)。しかし、残りの20点については照合できなかった(他の文献等によると、日本銀行が銭幣館所蔵貨幣資料全点を譲り受けたわけではないとされており、こうした事情によるものではないかと考えられる)。

第4表　銭幣館拓本資料分類と当館所蔵資料

銭幣館拓本分類	点数	当館所蔵	個体ID
銀銭(当館登録簿　古鋳)	29	26	1～4,6～12,14～18,20,25～30,32～34
銅銭(当館登録簿　古鋳)	9	6	36,38,40～43
銀銭(当館登録簿　後鋳)	8	8	13,45～51
以下すべて銅銭			
無記入(当館登録簿古和同様)	6	5	52,54～57
「銅色古和同ニ類ス　新和同ニ見エズ」	2	2	39,207
「銅色古和同ニ類ス」	8	8	53,206,208～213
「新和同第一期」 うち「孔方鑑」1点 うち「小珍」2点 「外一期、中、末品　三十品　背長郭ヲ含ム」	5	5	81,82,266,270,271
新和同「第二期」 「外三十品」	3	2	151,159
「降和」	1	1	279
無記入(「降和」と思われる)	5	3	280～282
「和字離隔」	1	1	284
「細字」 「外一点」	2	2	195,283
新和同「第三期」 「外三十一点」	2	0	
「背含円郭」	1	0	
「薄肉」	1	1	185
「長珎」	5	3	275,276,278
無記入	3	3	199,214,288
「巨字」	1	1	286
「神功座カ」	3	3	192,204,261
「隆平座カ」	1	1	259
「富寿座カ」	1	1	287
「異制」	5	5	200～203,205
無記入(ハネ和同)	9	8	289,291～297
無記入(禾和同カ)	11	8	299～301,303～306,309
「厚肉」	1	1	310
「参考品」			
「鋳放」	3	3	245,246,285
「鋳線」 外六品	4	4	218,220,223,224
「重文」	2	2	227,228
「背ズレ」	2	2	196,198
「挌痕」	2	2	229,230
「削品　異郭」 「外四ハネ　センベン　一」	3	3	235,236,237
「串痕」 「外一」	1	1	238
「折レロニ金粒ヲ見ル」(銀銭)	1	1	22
二連	5	5	247～251
「火葬骨壷ヨリ出ズ」	1	0	
欄外「外輪側ロクロ痕ノモノ」4 「盃形文」1 「和同背平板目ノモノ」1			
合　計	147	127	

(注)「　」で囲った部分は拓本に書き込まれていたもの。分類の書き込みが無かった拓本については、当館登録簿分類と照合し、可能なものについて当館登録簿分類名称をもとに補足した。

拓本の右上には書き込みがみられ、その内容は目録備考欄および第4表に記した通りであるが、分類名称を記したものと、特徴を記したものがあり、その記述方法には必ずしも統一性がみられない(分類等が付記された拓本に続く同じ種類の拓本について、「仝上」と記されているケースと、同じ種類と思われるが無記入のケースとがある。本目録上では「仝上」と記されたものについてのみ、その内容を備考欄に記した)。

書き込まれた分類について、拓本の掲載順に第4表に掲げた。この分類で特筆すべき点は、第一に分類名称は記されていないが、最初に銀銭の拓本29点、次に銅銭の拓本9点、次に銀銭の拓本8点が並べられており、第4表にある通り、ほぼ登録簿の古鋳の銀・銅銭、後鋳の銀銭と個体も一致する。つまり、田中啓文氏も、当館登録簿で後鋳の銀銭にあたる個体について、古鋳銀銭とは一線を画して考えていたことがわかる。

次に注目されるのは、銅銭について、当館登録簿での「古和同様」とは別に「銅色古和同ニ類ス 新和同に見エズ」「銅色古和同ニ類ス」という分類がなされていること、そして「新和同」を3期に画していることである。

拓本資料と当館所蔵資料で照合できる資料のうち、拓本資料の記載内容と当館登録簿分類で異なるケースがみられる。主な事例を以下に掲げる。

①当館登録簿で古鋳・銀銭に分類されている個体ID13が、銭幣館拓本資料では後鋳に分類。

②当館登録簿で後鋳・銅銭の「古和同様」に分類されている計6点について、銭幣館拓本資料では、個体ID52・54～57の5点は何も記載がなく、ID53が「銅色古和同ニ類ス」と記載。

③当館登録簿で後鋳・銅銭の「普通品」に分類されているもののうち、銭幣館拓本資料では個体ID206・208～213の7点が「銅色古和同ニ類ス」、個体ID207が「銅色古和同ニ類ス 新和同に見エズ」に分類。

④当館登録簿で後鋳・銅銭の「降和」に分類されている個体ID284が、銭幣館拓本資料では「和字離郭」。

⑤当館登録簿で後鋳・銅銭の「降和」に分類されている個体ID283が、銭幣館拓本資料では「細字」。

銭幣館拓本資料分類と郡司氏による当館登録簿分類は基本的な考え方はほぼ同じであるが、実際個々の資料に対する分類では多少の違いがみられる。

ただし分類は各個体の特徴のどこに重点を置くかにもよるため、例えば上記⑤のような分類の相違は大きな問題ではないであろう。

なお田中氏が「銅色古和同ニ類ス 新和同に見エズ」「銅色古和同ニ類ス」と分類した資料については、鋳期等との関連からも成分分析を行うことなどでその分類の妥当性が明らかになる可能性もある。

5．おわりに

以上、貨幣博物館所蔵和同開珎について、当館登録簿分類と計測結果の概要を紹介し、当館所蔵資料の原所蔵者田中啓文氏と、当館資料の整理をした郡司勇夫氏の分類について紹介してきた。田中氏や郡司氏の古銭学的な和同開珎の分類が、当館所蔵の実物資料の拓本や写真などと結びついて公開されることで、新たな段階に入った古代銭貨史研究の一助となれば幸いである。

[補足－1]金属組成分析による検証

当目録備考欄において④とあるものは、岡田茂弘、田口勇、齊藤努「和同開珎銅銭の非破壊分析結果について」(日本銀行金融研究所「金融研究」第8巻第3号、1989年)において分析された資料である。

この分析の目的は、古和同・新和同の成分比較、新和同銭における銭種と成分比との関係であった。分析には国立歴史民俗博物館の和同開珎29点と当館の和同開珎15点が用いられた(分析方法は蛍光X線分析法)。

古和同銭はいずれも銅含有率が90%を越え、錫・鉛の含有率は1%以下のものがほとんどであった。

新和同銭の多くは銅含有率が77～91%(当館所蔵品)で、古和同銭よりも多くの錫・鉛を含有しており、上記文献では「古和同銭と新和同銭の鋳造時期あるいは産地に明確な違いが存在したことを示すものと考えられる。」と結論付けている。

古和同様のもので唯一分析された個体ID52は銅含有率91%と新和同としては多いが、錫6%・鉛2%と古和同群にはみられない値を示している。詳しくは同文献を参照されたい。

また本目録で古鋳銅銭と分類されている全10点は、斎藤努・高橋照彦・西川裕一「古代銭貨に関する理化学的研究　－「皇朝十二銭」の鉛同位体比分析および金属組成分析」(IMES Discussion Paper Series 02-J-30、2002年9月)において鉛同位体比分析がなされている。

その原料供給地について国立歴史民俗博物館所蔵の古和同銅銭3点の分析結果と合わせ、「古和同は、一部長登鉱山を含みつつ、於福鉱山や香春岳付近からの原料供給を受けていたと想定される。」としている。詳しくは同文献を参照されたい。

[補足－２]富本銭との関係

富本銭の法量について平均値で、外縁外径は24.4mm、内郭内径6mm、厚さ1.5mm前後、重量4.59gと公表されている。古鋳銅銭の平均値と比較的近い値を示しているといえよう。

公表されている成分分析結果(蛍光X線分析法による)によると、富本銭は主成分を銅、副成分をアンチモン(4～25%、平均値8%前後)とする銅―アンチモン系の合金である。一方、[補足-1]の文献中で分析された当館所蔵古和同銅銭3点では、アンチモンはいずれも微量の検出である。

[補足－３]銭幣館分類と計測データ

銭幣館拓本資料分類は大分類については、ほぼ当館登録簿分類と同じであるが、小分類は当館と異なる部分もある。そのため各分類毎に平均値を求めたが、分類毎の点数が少ないため明確な傾向は得られなかった。(特に新和同第1～3期の特徴を明らかにするべく試みたが、確定できる個体数が少ないこともあり、特徴を把握することはできなかった。)

唯一特徴的なものとしては第4表で「銅色古和同ニ類ス 新和同に見エズ」「銅色古和同ニ類ス」と分類された孔径比の平均が0.33と比較的大きく、重量も平均2.73gと全点の平均値に比して軽量であった。今後これらの分類・計測データと成分分析値との整合性を検討していく必要があろう。

[補足―４]鋳造痕に関わる情報

銭幣館拓本資料の各拓本に書き込まれた情報(目録の備考欄に記載)の中で鋳造時の痕跡に関わるものがみられる。「鋳線」は、銭の表や裏面に線が見られるもので、鋳型にヒビが入り、鋳造時に銭に線状に現れた物である。また「重文」は銭文が二重に写し出されているもので、鋳型に母銭を置いた際に生じたものと考えられる。「センペン」(鏇辺)と記されたものは、轆轤作業の痕跡としているものである。この他、「鋳放」や2つの和同開珎がつながったいわゆるメガネ銭などを含めて、いずれも和同開珎の鋳造技術の検討の手がかりとなり得るものである。

「センペン」については、田中啓文氏自身が『銭幣館』11号で触れているほか、松村恵司氏が「和同開珎をめぐる諸問題」(『和同開珎をめぐる諸問題(一)』平成17年度研究集会報告書、2007年)において、いわゆる「古和同」の和同開珎の鋳造技術に関連して詳細に検討しており、当館所蔵資料についても、今後拓本記載情報の妥当性について他の出土資料などと合わせ、詳細な検討が必要である。

＜主な参考文献＞

岡田茂弘、田口勇、齊藤努「和同開珎銅銭の非破壊分析結果について」(日本銀行金融研究所「金融研究」第8巻第3号、1989年)
岡田茂弘「和同開珎銀銭について」(『郵政考古紀要21』、1995年)
郡司勇夫「和同銭談義」(『古泉』No.19、1956年)
郡司勇夫「和同開珎銭の鋳造」(『日本の科学と技術』No.196、1979年)
郡司勇夫編『日本貨幣図鑑』(東洋経済新報社、1981年)
齋藤努、高橋照彦、西川裕一「古代銭貨に関する理化学的研究　―「皇朝十二銭」の鉛同位体比分析および金属組成分析―」(金融研究所Discussion Paper J-Series No.2002-J-30 、2002年)
田中啓文(金壹仙人)「私の和同銭観」(『貨幣』38号、1922年)
田中啓文「隷開和同開珎」(『貨幣』156号、1932年)
田中啓文「鑑定上から見た古和同銭の鋳造年代」「皇朝銭種の鑑定と分類」(『銭幣館』11号、1951年)
松村恵司「富本銭出土遺跡考」(『文化財論叢Ⅲ』奈良文化財研究所創立50周年記念論文集、2002年)
松村恵司「日本初期貨幣研究史略:和同開珎と富本銭・無文銀銭の評価をめぐって」(日本銀行金融研究所「金融研究」第24巻第1号、2005年)
松村恵司・栄原永遠男編『和同開珎をめぐる諸問題(一)』(科学研究費報告書、2007年)
奈良文化財研究所『平城京出土　古代官銭集成Ⅰ』(奈良文化財研究所、2004年)
日本銀行調査局編『図録　日本の貨幣　1』(東洋経済新報社、1972年)

【写真・イラスト提供先】

以下の写真・イラストについては、下記機関等よりご提供をいただいた。特に、記載のないものは当館所蔵資料。

○2 ページ

無文銀銭(石神遺跡出土)	奈良文化財研究所
富本銭・富本銭未成品とヤスリ(飛鳥池遺跡出土)	奈良文化財研究所
藤原京復元模型	橿原市教育委員会
飛鳥池遺跡模型	奈良文化財研究所

○6 ページ

『漢書』「食貨志」・『史記』	国立国会図書館
平城京復元模型	奈良市役所

○10 ページ

木簡(平城京出土)	奈良文化財研究所

○12 ページ

イラスト:市のにぎわい	奈良文化財研究所(早川和子氏)
木簡(平城宮出土)・木簡(長屋王邸宅跡出土)	奈良文化財研究所
市で売られた品々(復原)・下級役人の食事(復原)	奈良文化財研究所

○13 ページ

銭貨・木簡(長屋王邸宅跡出土)	奈良文化財研究所

○17 ページ

興福寺金堂の鎮壇具	東京国立博物館
奈良県頭塔の心柱跡から出土した銭貨	奈良文化財研究所
平城京出土の胞衣壺	奈良文化財研究所
小治田安萬侶墓からの出土品	奈良文化財研究所
宮ノ本一号墓出土の買地券(複製)	国立歴史民俗博物館(原資料は、太宰府市教育委員会が所蔵)
藤原宮跡出土富本銭関連資料	奈良文化財研究所

○19 ページ

長登銅山全景・瀧ノ下 4 号坑・岩に付着した緑青	美東町教育委員会
東大寺盧舎那仏	写真提供先:奈良市観光協会　写真撮影者:矢野建彦氏
木簡(長登銅山跡出土)・珪孔雀石・木簡出土状況	美東町教育委員会

○20 ページ

長門鋳銭司跡・和同開珎鋳型・鞴羽口	下関市教育委員会
岡田鋳銭司跡・和同開珎・坩堝	木津川市教育委員会
周防鋳銭司跡・坩堝と鞴羽口	山口市教育委員会
イラスト:銅銭ができるまで	奈良文化財研究所(早川和子氏)

○21 ページ

飛鳥池遺跡全景・富本銭・ガラス工房からの出土資料	奈良文化財研究所
長屋王邸宅跡出土の種銭・流通貨	奈良文化財研究所
左京三条四坊七坪遺跡出土の「めがね銭」・鋳造関係資料	奈良文化財研究所
細工谷遺跡出土の和同開珎枝銭	大阪市文化財協会

【主要参考文献】

本企画展開催にあたり参考にした主な文献は以下のとおり。松村恵司・栄原永遠男編『日本初期貨幣研究文献目録(稿)』2005 年※に掲げられた文献については割愛した。(年代順)

※同文献目録に掲げられたものについても、本企画展にあたり特に参照したものについては、以下に掲げた。

東亜考古学会『東方考古学叢刊　甲種第 5 冊　東京城』東亜考古学会　1939
西尾銈次郎『日本鉱業史要』十一組出版部　1943
佐藤武敏『中国古代工業史の研究』吉川弘文館　1962
原田敏明・高橋貢訳『日本霊異記』平凡社　1967
薮内清訳注『天工開物』平凡社　1969
浅香年木『日本古代手工業史の研究』法政大学出版局　1971
赤塚忠訳『中国古典文学大系　書経・易経(抄)』平凡社　1972
池田温訳「西安南郊何家村発見の唐代埋蔵文化財」『史学雑誌』81-9　1972
山口県教育委員会「長門国鋳銭遺物」『山口県文化財要録第 3 集』1977
東野治之「鳥毛立女屏風下貼文書の研究－買新羅物解の基礎的考察」『正倉院文書と木簡の研究』塙書房　1977
山崎一雄「銅鏡、銅鐸など青銅器の化学成分」『考古学と自然科学』15　1983
西嶋定生『日本歴史の国際環境』東京大学出版会　1985
加茂町教育委員会『銭司遺跡』加茂町教育委員会　1986
永田英正・梅原郁訳注『漢書　食貨・地理・溝洫志』平凡社　1988
奈良国立文化財研究所『平城京展』朝日新聞社　1989
美東町教育委員会『長登銅山跡Ⅰ・Ⅱ』1990、1993
栄原永遠男『天平の時代』集英社　1991
奈良国立文化財研究所『平城京長屋王邸宅と木簡』奈良県教育委員会　1991
加藤繁『中国貨幣史研究』東洋文庫　1991
栄原永遠男『奈良時代流通経済史の研究』塙書房 1992
中村順昭「奉写一切経所の月借銭について」『日本歴史』526　1992

栄原永遠男『日本古代銭貨流通史の研究』塙書房 1993
奈良国立文化財研究所『平城京長屋王邸跡－左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告－本文編』奈良国立文化財研究所 1995
池田善文「山口・長登銅山跡」『木簡研究』18 1996
国立歴史民俗博物館『お金の玉手箱－銭貨の列島 2000 年史－』国立歴史民俗博物館 1997
李成市『東アジアの王権と交易』青木書店 1997
中国銭幣大辞典編集委員会『中国銭幣大辞典 秦漢編』中華書局 1998
大阪市文化財協会『細工谷遺跡発掘調査報告Ⅰ』大阪市文化財協会 1999
中島圭一「日本の中世貨幣と国家」歴史学研究会編『越境する貨幣』 1999
舘野和己『古代都市平城京の世界』山川出版社 2001
桜井英治編『国立歴史民俗博物館研究報告第 92 集 古代・中世の都市をめぐる流通と消費』国立歴史民俗博物館 2002
桜井英治・中西聡編『流通経済史』山川出版社 2002
山田勝芳『貨幣の中国古代史』朝日新聞社 2002
奈良文化財研究所『飛鳥・藤原京展－古代律令国家の創造－』朝日新聞社 2002
大阪歴史博物館『よみがえる銅－南蛮吹きと住友銅吹所－』大阪歴史博物館 2003
松村恵司・栄原永遠男編『わが国鋳銭技術の史的検討』科学研究費報告書 2003
陝西省博物館他『花舞大唐春－何家村遺寶精粋－』文物出版社 2003
西安文物保護修復中心『漢鐘官鋳銭遺址』科学出版社 2004
奈良文化財研究所『平城京出土古代官銭集成Ⅰ』奈良文化財研究所 2004
桜井英治編『国立歴史民俗博物館研究報告第 113 集 古代・中世における流通・消費とその場』国立歴史民俗博物館 2004
松村恵司・栄原永遠男編『古代の銀と銀銭をめぐる史的検討』科学研究費報告書 2004
栄原永遠男「石山寺増改築工事の財政と銭貨」『金融研究』24-1 2005
松村恵司「日本初期貨幣研究史略：和同開珎と富本銭・無文銀銭の評価をめぐって」『金融研究』24-1 2005
三上善孝『日本古代の貨幣と社会』吉川弘文館 2005
山中章等編『文字と古代日本3 流通と文字』吉川弘文館 2005
中村修也『日本古代商業史の研究』思文閣出版 2005
松村恵司「古代銭貨の銭文」『文字と古代日本4 神仏と文字』吉川弘文館 2005
神崎勝『冶金考古学概論』雄山閣 2006
井上伸一「出産と陰陽五行--胞衣埋納儀礼の象徴性と理論構造」『歴史民俗学』25 2006
宮澤知之『中国銅銭の世界－銭貨から経済史へ－』 思文閣出版 2007
中島敏編・西嶋定生訳注『晋書食貨志譯註』東洋文庫 2007
江草宣友・三上喜孝・仁藤敦史編『古代銭貨関係史料集(稿)』 書信館出版 2007
松村恵司・栄原永遠男編『和同開珎をめぐる諸問題(一)』科学研究費報告書 2007

【展示資料】

和同開珎の時代とくらし

資料名	年代
無文銀銭(複製)	(7世紀後半)
富本銭(複製)	(7世紀後半)
和同開珎	708(和銅元)年発行
万年通宝	760(天平宝字4)年発行
神功開宝	765(天平神護元)年発行
隆平永宝	796(延暦15)年発行
富寿神宝	818(弘仁9)年発行
承和昌宝	835(承和2)年発行
長年大宝	848(嘉祥元)年発行
饒益神宝	859(貞観元)年発行
貞観永宝	870(貞観12)年発行
寛平大宝	890(寛平2)年発行
延喜通宝	907(延喜7)年発行
乾元大宝	958(天徳2)年発行
『日本書紀』	720年完成(展示資料は18世紀の複製本)
『日本紀略』	(成立年代未詳)
『旧唐書』「食貨志」	10世紀中頃完成(展示資料は清代の複製本)
大平興宝	970年発行
開元通宝	621年発行
光緒通宝	1875年発行
乾元重宝(高麗)	997年頃発行
朝鮮通宝	1423年頃発行
寛永通宝	1636年発行
『和漢泉彙・上編』	1793(寛政5)年
『中外銭史・ニ』	1831(天保2)年
『和漢古今泉貨鑑・九十十一』	1798(寛政10)年
『和漢古今宝銭図鑑』	1694(元禄7)年版・1696(元禄9)年版
『皇朝銭図・完』	1799(寛政11)年
『懐宝古銭鑑』	1850(嘉永3)年版
『田中会長在任二十年記念泉譜』	1940(昭和15)年
<参考資料>	
銭繈(1貫文繈)	江戸時代
銭繈(100文繈)	江戸時代

資料名	年代
『鼓銅図録』	19世紀初
<参考資料>	
自然銅	—
赤銅鉱	—
黒銅鉱	—
孔雀石	—
藍銅鉱	—
珪孔雀石	—
黄銅鉱	—
斑銅鉱	—
和同開珎	708(和銅元)年発行
和同開珎 銭笵	8世紀初
鞴羽口	8世紀初
坩堝	8世紀初

サテライト展示「2500年の伝統と技」

資料名	年代
空首布	西周末期(前8～7世紀)
五銖銭	前漢時代(前118年発行)
五銖銭 鋳型	前漢時代(前2世紀後半～後1世紀)
五銖銭 原母笵	前漢時代(前2世紀後半～後1世紀)
四銖半両銭	前漢時代(前175年発行)
四銖半両銭 鋳型	前漢時代(前2世紀)
四銖半両銭 原母笵	前漢時代(前2世紀)
一刀平五千	前漢末(7年発行)
一刀平五千 原母笵	前漢末～新代(7 ～23年)
大泉五十	前漢末(7年発行)
大泉五十 鋳型	前漢末～新代(7 ～23年)
大泉五十 原母笵	前漢末～新代(7 ～23年)
貨布	新代(14年発行)
斉法化	戦国時代(前5～3世紀)
斉法化 鋳型	戦国時代(前5～3世紀)
方足布	戦国時代(前5～3世紀)
方足布 鋳型	戦国時代(前5～3世紀)
半両銭(大様)	戦国末～秦(前3世紀)
半両銭(私鋳銭)	戦国末～秦(前3世紀)
半両銭 鋳型	戦国末～秦(前3世紀)
陰文四銖銭	斉代(479～502年)
陰文四銖銭 鋳型	斉代(479～502年)
五銖銭	梁代(557年発行)
五銖銭 鋳型	梁代(502～557年)
『鋳銭図解』(複製)	(原本は18世紀)

日本銀行金融研究所

貨幣博物館

電話：03－3277－3037(直通)
〒103-0021
東京都中央区日本橋本石町 2-1-1
http://www.imes.boj.or.jp/cm

2008 年1月 11 日発行

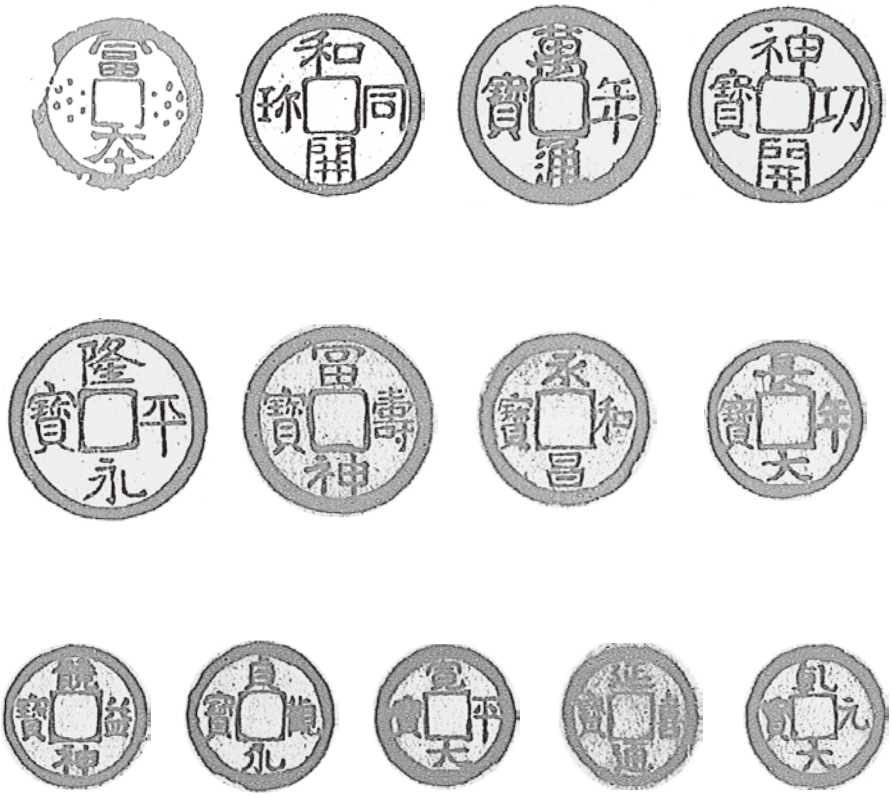
ご協力をいただいた機関

(50 音順)

大阪市文化財協会
橿原市教育委員会
木津川市教育委員会
国立国会図書館
国立歴史民俗博物館
下関市教育委員会
太宰府市教育委員会
東京国立博物館
東大寺寺務所
（財）東洋文庫
奈良市役所
奈良文化財研究所
（財）前田育徳会
美祢市教育委員会
山口市教育委員会

［会期］
2007年12月8日(土)～2008年3月9日(日)

［展示企画担当］
佐藤大樹
関口かをり
湯川紅美



出典：富本銭『古泉通盖』（1858 年）
（背表紙の画像も同出典）
その他『皇朝銭図』（1799 年）